

VIEW21

特集

「主体性」の育成 ③

世界に生きる人材を育てる

指導変革の軌跡

学びの質の向上 ◎宮崎県立宮崎大宮高校
探究活動 ◎大阪府・私立関西大学高等部

30代教師の
「転んでも起きる!」

6年間を見通した指導体制で、生徒の英語運用力向上を目指す
愛知県・私立南山高等・中学校女子部 ◎糟屋 徹

新課程の
ファースト・ステップ

教科間の連携と中学校までの学びの確認がいっそう重要に

2 私を育てたあの時代、あの出会い

心からの言葉は必ず生徒に響くことを学んだ

福島県立福島高校◎浜田伸一

4 特集

「主体性」の育成③

世界に生きる人材を育てる

6 現状整理 世界を意識する社会・大学、海外への関心が低い日本の若者

8 3人の生き方から考える 世界に生きることの価値、世界に生きる人に必要な力

- ・新興国ベトナムで気付いた、日本人だから出来る世界への貢献と新しい幸せの価値観
ハバタク株式会社 取締役・アジア地域統括 小原祥嵩

- ・「同じ人間」のために、国境を超えて大切な命と向き合う
国境なき医師団 アドミニストレーター 辻坂文子

- ・日本の小さな町での本物の交流が、多様な価値観を受け入れるグローバルな場になる
「ナガサキアイランズスクール・小さな世界学校」代表 小関 哲

16 学校現場から考える 日本人らしさを強みに世界に生きる人材を地域で育てる

山形県立米沢興譲館高校◎渡會朋和 / 高知県・私立土佐塾中学・高校◎藤澤佑介

20 指導変革の軌跡

20 宮崎県立宮崎大宮高校

学びの質の向上◎量から質の指導に転換、生徒の主体性を育て行くべき大学を目指す

24 大阪府・私立関西大学高等部

探究活動◎探究能力と学力の両面を追究する新設校の挑戦

28 30代教師の「転んでも起きる！」

6年間を見通した指導体制で、生徒の英語運用力向上を目指す

愛知県・私立南山高等・中学校女子部◎稲屋 徹

30 生きたデータの徹底活用

3年生の実績データを活用し、新課程での合格ストーリーを描く

34 未来をつくる大学の研究室

統計解析にコンピューターを活用し、数百年に1度の大規模洪水を予測

京都大防災研究所 宝馨研究室

38 新課程のファースト・ステップ

—新課程先行実施総括—

教科間の連携と中学校までの学びの確認がいっそう重要に

42 VIEW'S REPORT

上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム

新課程直前・高校英語「授業は英語で」を考える一何のために、どのように行うのか—

44 大学選択 新たな視点

学生に学びの土台となるスキルを明示し、養成する大学

48 VIEW'S SQUARE

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

心からの言葉は必ず 生徒に響くことを学んだ

福島県立福島高校 浜田伸一

生徒は教師の言葉に敏感だ。教師がどれだけ本気で語っているか、たちどころに見抜いてしまう。では、生徒の心に響く言葉はいかにして生まれるのか。先輩との出会いを通して言葉の力を知った浜田先生が、今も続く探求の日々を語る。

進学校での進路指導の重責



いつかは母校で教えたいという念願が叶って安積高校に赴任

したのは、41歳の時でした。既にベテランと呼ばれる年齢でしたが、県下屈指の進学校の同校で、自分の教科指導や進路指導が通用するだろうかと不安も抱いていました。

初年度から1年生を担当しましたが、やはり生徒は教師の力量を的確に見抜くハイレベルな集団でした。課外時に「○○先生が担当ではないのですか」と、指導に定評のある先生の名前を出され、悔しい思いをしました。持ち上がりで3年生の担任を

務めました。進路指導にはさ

らに重責を感じました。先輩方に教えていただきながら指導しましたが、なかなか生徒の本音を引き出せずに悩みました。今考えると、「失敗したくない」という思いから守りに入り、私

自身が生徒に本気でぶつかって

いなかったのだと思います。そんな私の守りの姿勢を根本から揺さぶってくださったのが、当時、進路指導部長だった

浅野嘉尚先生です。浅野先生の言葉にはとにかく重みがあり、不思議なほどに生徒の心を動か

しました。集会での一言が生徒の手で廊下の黒板に書かれ、学校新聞の「流行語」に選ばれたこともありました。卒業文集に生徒が書いた「志を何に向けた

らよいか分からない者、志が高

すぎて持て余している者は、一度、その思いを浅野先生と語るべし」という一文からも、どれほど生徒の信頼を集めていたかが分かります。

言葉巧みに生徒の心を引きつけるかと思えば、ある集会では押し黙り、最後に「安積高校には夏休みはありません。勉強してください。以上」とだけ発して生徒の喝采を浴びるなど、その場の空気を支配する緩急ある

指導はまさに圧倒的でした。「浅野語録」は今もたくさん心に

残っています。「汝、何のためにここに在りや」「火種が強ければ火は燃え上がる」といった言葉には、私自身も感動し、「もっと頑張らなくては」と指

導への思いを熱くしました。

不安だからこそ人は進歩する

浅野先生の巧みな言葉は生来のセンスなのだ、最初は思っていました。ところが、それは少し違いました。

ある集会の後、浅野先生が「今日は準備が不十分だった」と残念そうに漏らしていました。どういうことかと聞くと、浅野先生は集会前に、その時期の生徒の心情を推し量った上で話す内容を練り、さらに持ち時間を考

えながら、通勤の車内で実際に声に出して何度も練習しているのだと教えてくださいました。

それまで紋切り型の言葉を弄するだけで生徒に本気でぶつかっていただけの私は、自分の

先輩教師の言葉

生徒に話をする
機会を持てたことに
深く感謝をする

福島県立安積高校元教諭
浅野嘉尚



私は生徒にインパクトのある言葉を投げ掛けようと

しましたが、浜田先生はじわじわと生徒の内面に迫る指導をされていきました。まるで、しとしとと降る「春雨」のように、生徒の心に染み込んで育てる、そんなイメージで、当初から「懐の深い先生だな」と思っていました。私とはタイプは違いましたが、浜田先生が私の言葉から学んだと言ってくださいるのはとてもうれいすし、今更ながら言葉の力とそれに対する責任の大きさを感じます。

生徒への言葉を考える際、私には「こんなに優秀な生徒の前で話すチャンスがあるなんてありがたい」という感謝の思いが常にありました。安

左 あさの・よしなお 数学科。福島県立南会津高校、小野高校、川俣高校、福島高校、安積高校、私立・福島成蹊高校を経て、現在、桜の聖母学院高校講師。

右 はまだ・しんいち 国語科。東京都足立区立第四中学校、福島県立磐城農業高校、石川高校、安積高校を経て、福島高校へ。進路指導副部長。

撮影○福島高校にて



甘さを深く反省しました。そして、それ以降、自分の経験を踏まえた言葉を選び抜いて語り掛けるように心掛けました。それは難しいことでしたが、次第に生徒との距離が近づいていくのを感じました。

その後、浅野先生は定年退職されました。「私を『頼れる人』と思ってくれたのなら、皆さんがそれに続く人になってほし

い」という退任の挨拶を聞いて、自身の成長を心に誓いました。

2回目の3年生を卒業させた後、私は進路指導部長の大役を打診されました。浅野先生のよ

うな指導が出来るとは思えず、断るつもりでしたが、結論を出す前に浅野先生に相談しようと思

がある」「極言すれば、教師が夢を語れば、それが進路指導だ」と、私を励ましてくださいまし

た。さらに後日、励ましの手紙までいただき、考えを改めて重責に挑むことにしました。

その後、安積高校と並ぶ進学校である福島高校に異動し、進路指導部に配属されましたが、今も生徒を鼓舞する言葉を生み出すことの難しさを実感する毎

日を送っています。それでも、浅野先生から思いを引き継いでいることは私の誇りです。

福島では震災で生徒が心に深い傷を負いました。私は、苦難に向き合うこの福島から、次代を築くリーダーを送り出したいと思っていきます。浅野先生の教えを胸に、まず私自身が夢を語りながら、生徒の志を大切に育てていきます。

積高校の生徒は打てば響く本当によい生徒ばかりでした。だからこそ、少しでも心に残る言葉を掛けたいと思い、妥協せずに考えられました。

しかし、どれだけ準備をしたつもりでも、「これが抜けていた」と、後でいつも反省したものです。その思いがまた、次の話を考える原動力になりました。当時は、「もし自分が高校生だったら、どういう言葉に勇気付けられるか」と、自分に置き換えて考えていたように思います。

私は、生徒に誇りを持たせる言葉を大切にしていました。ある集会で、「安積高校は丘の上に立つ高校である」と、誰もが羨む高校で学んでいるのだから誇りを持ってほしいと比喩的に話したところ、生徒がシーンとなって聞き入ってくれたことがあります。誇りを持つことで生徒は大きく育つものです。

今の先生方には、明日の日本を考えた教育をしていただきたいと思っています。これからの平和な日本をつくる人材を育てることが先生方の使命です。教師という仕事に誇りを持ち、不幸な震災を乗り越えて大きく育とうとする生徒を力強く支えてください。

「主体性」の育成 ③

世界に生きる

人材を育てる

グローバル化社会の中での「ローカル」に焦点を当てた12月号に続き、

今号では、国境を超えたより広い世界、すなわち「グローバル」に生きることを取り上げる。

主体的に「世界に生きる」とはどういうことか。実際に活躍している人たちの生き方を通して、

世界に生きるための力と、その育成のための高校での指導について考える。

グローバル化の中での
人材育成を

教師はどう考えているか？

「『社会に出た時のために』とよく言うが、その『社会』は、まだまだ『日本社会』だ。まず、私たち教師の視点をグローバル化しなければならぬ」(京都府)

「地元の中小企業でも、生き残りのために海外進出をしている。このような現実を見ると、生徒に世界標準を意識させると同時に、日本人のアイデンティティを再確認させるような指導が必要だと思う」

(静岡県)

「違う価値観の人と、どう折り合いをつけていくのかを学ばせるのは、海外の人との交流が大きなきっかけになると思う。それが身近な人とのコミュニケーション力にもつながるだろう。多様な価値観との出会いを多く持たせたい」(岡山県)

出典：『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは2012年8月にWeb及び用紙の郵送により実施。回答はWebもしくはファクスで回収。有効回答数は71。

8月号で見てきた、社会の環境変化に立ち向かうために必要なこと
「主体性」の育成

本号のテーマ

グローバル化社会で、主体的に「世界に生きる」ために
 必要な力と、その力を育む指導とは？

1. 「世界に生きる」ために必要な力とは？ ▶ 3人の生き方から考える P.8～15

「知恵と思いやりの心で、外国の人と新しい価値をつくり上げていくこと」
ハバタク株式会社 取締役・アジア地域統括 おはらよしとか
 小原祥高



「価値観の差異に好奇心を持ち、対話をする姿勢」
国境なき医師団 アドミニストレーター つじさかあやこ
 辻坂文子



「ローカルな本物の体験を通して身に付く、多様な価値観と向き合う力」
「ナガサキアイランズスクール・小さな世界学校」代表 おせきさとし
 小関 哲



2. 「世界に生きる」人材を育むための指導とは？ ▶ 学校現場から考える P.16～19

「固定化された『グローバル人材』のイメージを、教師が問い直す」
山形県立米沢興譲館高校 こうじょうかん わたらい
 渡會朋和



「やってよかったという体験を積み重ねて、世界に飛び出す力を付けさせる」
高知県・私立土佐塾中学・高校 ふせき けん
 藤澤佑介



生徒にとって、「世界に生きる」ことの捉え方が変わり、主体的に生きる選択肢が広がる

8～2月号の特集では、社会環境変化の中での「主体性」の育成について取り上げました

8月号
 環境変化に立ち向かう
 「主体性」を育む

ポイント
 デジタル化、グローバル化
 する環境においては、「主体
 性」の育成が重要

10月号
 「分かる」授業の追求で
 学びの「主体性」を
 引き出す

ポイント
 デジタル機器を活用すること
 で、指導や学びの質が高ま
 り、生徒が自ら学びに向かう

12月号
 地域に生きる
 人材を育てる

ポイント
 教師が視野を広げ生徒と対
 話することで、地域を創る生
 徒が育つ

2月号
 世界に生きる
 人材を育てる

ポイント
 日本人らしい世界での生き
 方を伝えることで、生徒と
 「世界」の距離が縮まる

- ◎生徒の主体性を育むには、教師の視野を広げることが大切。
- ◎デジタル化、グローバル化の進む社会環境は、このための追い風となる。

現状整理

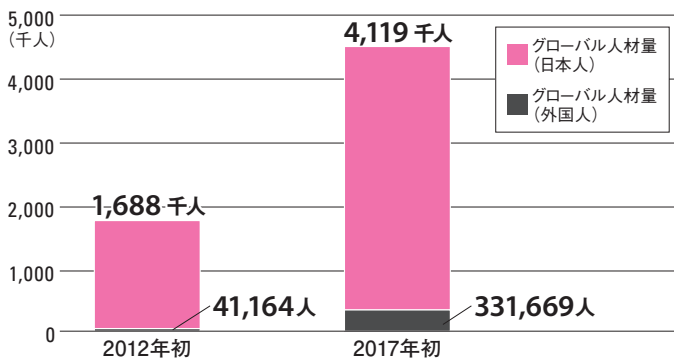
図1は、企業の「グローバル人材」に対するニーズを聞いたアンケートを基に、グローバル人材の需要を推計した結果だ。2017年には、グローバル人材需要量は約412万人になり、12年と比較して約250万人の増加が見込まれている。社会では、確実にグローバル人材の需要が高まるといえる。

図2を見ると、グローバル化への対応として、大学が学生の留学支援を強化しようとしていることが分かる。特に国立大では、その8割が「海外に留学する学生を増やす方針に基づき、実行策を検討している」と答えた。

一方、若者の意識を見ると、社会の状況や大学の施策の変化に対応できていない点もありそうだ。図3

図1 グローバル人材需要量の将来推計値

1-1 グローバル人材量と、そこに占める外国人のグローバル人材量の将来推計値



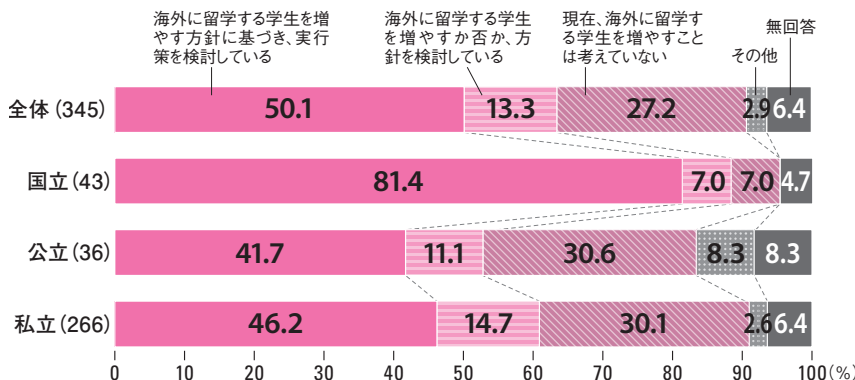
1-2 企業規模(常用雇用者数規模)別のグローバル人材需要量発生率

常用雇用者数	グローバル人材需要発生率 (全体)	
	2012年初	約5年後
299人以下 (50~299人)	5.6% (N=515)	7.2% (N=366)
300~1,999人	6.9% (N=223)	8.7% (N=132)
2,000人以上	11.0% (N=63)	17.8% (N=28)

*企業アンケートの調査票において「グローバル人材」とは、以下の①②③の全てに該当する者とした
 ①現在の業務において他の国籍の人と意思疎通を行う必要がある
 ②①の意思疎通を英語で(あるいは母国語以外の言葉で)行う必要がある
 ③ホワイトカラー職(現行の日本標準職業分類における大分類A~D[管理的職業従事者、専門的・技術的職業従事者、事務従事者、販売従事者]を指す)の常用雇用者である
 出典/経済産業省調査事業「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」

図2 大学の留学生送り出しの方針

Q. 貴大学の国際化の一環として、留学生の送り出しに関しては現在どのようにお考えですか



*対象は、英語担当教員責任者 345人。()内はサンプル数
 出典/Benesse 教育研究開発センター「大学における英語教育の改革等に関する調査」(2009)

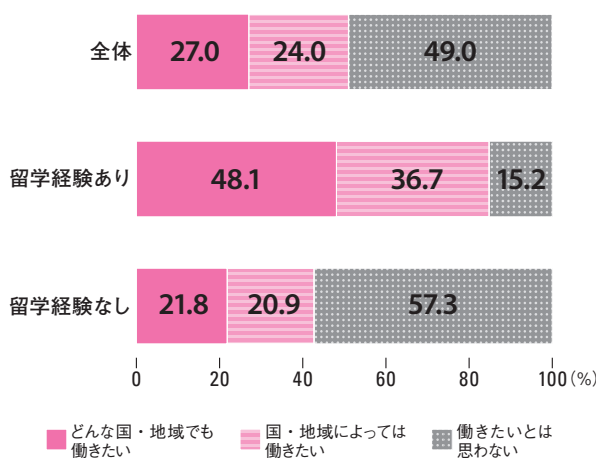
世界を意識する社会・大学、海外への関心が低い日本の若者

グローバル化の進展に企業や大学はどのように対応しようとしているのだろうか。グローバル人材の今後の需要動向、若者の海外志向や大学の対応を、データを基に整理する。

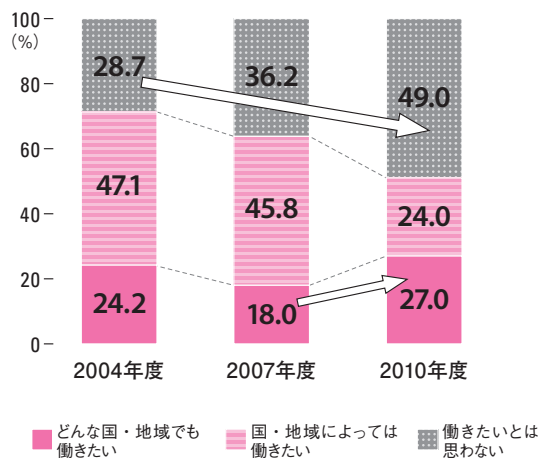
は、新入社員に海外勤務の志向について尋ねた結果だ。「海外で働きたいとは思わない」と答える新入社員は全体で約5割に達する。ただし、その意識は一律ではなく、留学経験がある新入社員は海外志向が高い。経年変化を見ると、「どんな国・地域でも働きたい」と思う新入社員が増える一方で、「働きたいとは思わない」と思う新入社員も増えている。留学生送り出しを進める上での課題を大学に尋ねた結果が、図4だ。経済的な問題や就職活動とのかねあいなど、個人では解決できない問題に続き、「学生の海外への興味・関心が低下している」点を、回答者の約4割が問題視している。グローバル化が進んでいるにもかかわらず、学生の意識は海外に向いていない。企業や大学がグローバル化に対応しようと具体的に動いている中で、高校はどうすればよいのだろうか。生徒が世界に目を向けて主体的に「世界に生きる」ためには、どのような力を育めばよいのか。次ページから考えていきたい。

図3 新入社員の海外勤務の志望状況

Q. 今後、海外で働きたいと思うか (2010年度)



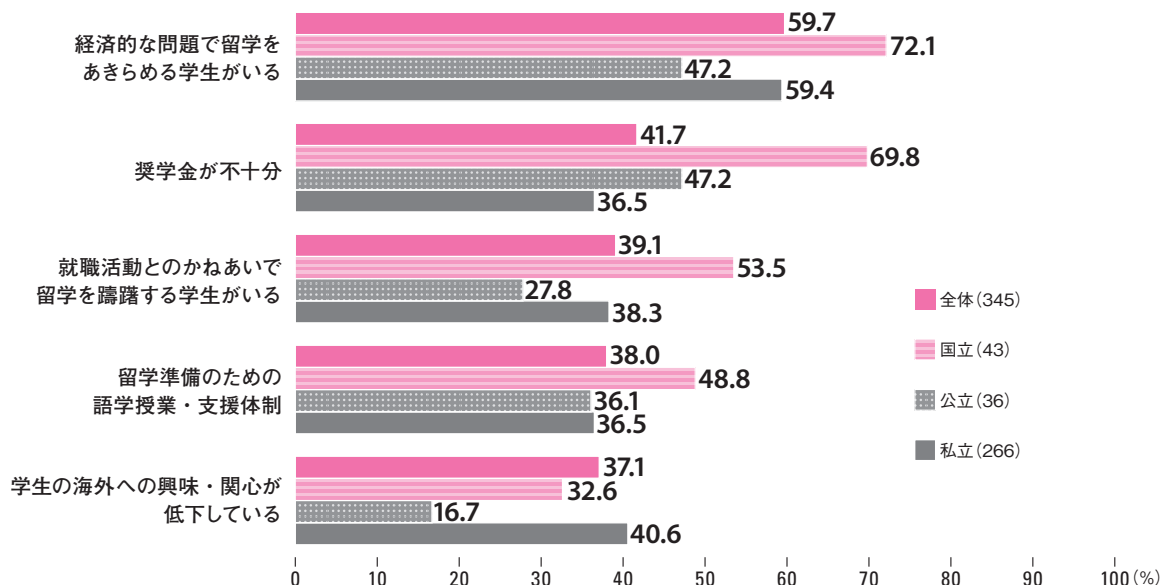
Q. 今後、海外で働きたいと思うか (経年比較)



*対象は、2010年度に新卒入社した新入社員(18~26歳)400人
出典/産業能率大「第4回新入社員のグローバル意識調査」(2010年7月)

図4 留学生送り出しの課題

Q. 貴大学にとって、留学生送り出しの課題は何でしょうか



*複数回答 *対象は、英語担当教員責任者345人。()内はサンプル数
出典/Benesse教育研究開発センター「大学における英語教育の改革等に関する調査」(2009)

3人の 生き方から 考える

世界に生きることの価値、 世界に生きる人に必要な力

「日本はグローバル化を迫られている」と言われる中、次代を生きる生徒たちが、主体的に「世界に生きる」ためにはどんな価値観、力が必要なのだろうか。さまざまな場所に暮らしながら、世界の中で生きることを楽しむ3人の生き方から考える。

新興国ベトナムで気付いた 日本人だから出来る世界への貢献と 新しい幸せの価値観

ハバタク株式会社 取締役・アジア地域統括 おはらよしただか 小原祥嵩

世界での日本人の 価値が問われている

ハバタク株式会社のベトナム支社の主な業務は、大きく2つあります。1つは、ベトナムを中心とするメコン地域への進出を検討する日系企業向けのコンサルティングで、ベトナムの市場調査や会社設立時の支

援などを行います。もう1つは、ベトナムで起業を考えている個人を対象としたビジネス開拓ツアーの企画・運営です。約1週間、ベトナム人の家にホームステイをしながら、ワークショップなどを通して、現地目線でベトナムを理解し、ビジネスアイデアを創発することを目的としています。

2011年からベトナムを拠点に

活動していますが、元々、私はコンピュータ分野の多国籍企業の日本人に就職し、組織や業務改革の支援を行うコンサルタント業務を担当していました。しかし、リーマン・ショックにより、それまで以上にコスト削減が推し進められるようになると、日本人コンサルタントは、より安く雇用でき、しかも同等の仕事をこなせる新興国のコンサルタントに仕事を奪われ始めたのです。業界動向をレポートにまとめるなど、従来ならば日本人の若手社員が担当していたような仕事は、どんどん外国人に任せられるようになりました。

時間とお金を掛けて日本人を育てる余裕のなくなった企業にとって、それが合理的な選択であることは理解しつつも、世界の市場で日本人が価値を失いつつある現状を、私は悔しく思いました。これまで日本で評価されてきた能力やスキルが時代に合わなくなってきたのではないかと、日本人が世界で再び存在感を発揮するためには教育のあり方を見直す必要はないか、と考えるようになりました。独立への気持ちが高まっていったのです。

社会が変化する今、 日本人も変わるべき

今、日本企業でも海外人材の採用を行うところが増えています。「海外の学生は、日本の学生よりも意欲的で優秀だ」という言葉もよく耳に

します。確かに私もそう感じることはありませんが、もちろん全ての外国人学生が優秀なわけではありません。グローバル企業に就職するために、日本人学生と限られた席を巡って競うような学生たちは極めて優秀だ、と言うべきでしょう。

では、なぜ彼らは優秀なのでしょう。ベトナムでは上昇志向を持つ学生は、最初から外資系企業を狙っていて、国内企業に目を向けていません。自分の力でより高い給料、より物質的に豊かな生活を獲得するというハングリー精神があり、だから大学での学びに対しても積極的なのです。新興国であるベトナムには、皆と同じように勉強して就職すれば、とりあえず一生安心して暮らせるような社会、つまり日本のような社会はまだないからです。

逆に、日本の若者が海外の学生に比べて積極性に乏しいのは、先人たちの努力でつくられた豊かな社会で生きてきたからといえます。若い世代の1人として、私はそうした社会をつくってくれた先人たちに深く感

謝しています。しかし、社会状況が変わった今、否が応でも海外の若者と競い合わなければならなくなっているのも事実です。日本人はこのような現実を受け止め、変わらなければいけない部分もあると思うのですが、危機感を持っている人はまだ少ないように私は感じます。

日本人は世界に誇る ソフトパワーを持っている

特に教育にかかわる人たちは、これからの日本人が世界でどういう価値を発揮できるのか、真剣に考えなければならぬと思います。確かに「読み・書き・計算」のような基礎学力の面では日本の教育は今でも優れていると思いますが、社会で求められると思っているのは、与えられたことだけを正確にこなす人材ではないことは周知の通りです。自らビジョンを描き、未知の世界に飛び込める力、自らの足で泥臭く走り回れる強さを育めるように、日本の教育は変わらなければいけないでしょう。

しかし、日本人には世界で活躍する上での強みもあると思います。日本人が伝統の中で身に付けてきた気遣いやもてなしの心、道徳心です。実際、ベトナムの人たちに「外国人が経営する企業で働くなら、どの国の会社がいいか」と聞くと、大抵の人は「日本人の会社だ」と答えます。従業員を家族のように大切に扱い、ビジネスにおいてもモラルを重んじる日本人の精神性の高さは、海外でも尊敬を集めていて、これからも武器になるはずですよ。

これまで日本は、ものづくりの技

術で評価されてきました。しかし今、日本製品は韓国製品などに取って代わられています。単に機能的に優れたものづくりでは、コスト面でも新興国に勝つのはこれからも難しいでしょう。だからこそ、コスト以外の価値、「日本人らしさ」というソフトパワーを付加価値として更に高めることが重要だと思っております。

新興国に対して日本だから 出来る貢献がある

今、ハバタク株式会社



おはら・よしたか

◎ 1982年兵庫県生まれ。兵庫県西宮市立西宮東高校卒業。大阪府立大工学部卒業。同大学院工学研究科修士課程修了。多国籍企業の日本法人に入社し、戦略コンサルタントとして複数業界・業種のクライアントに対する組織・業務変革の支援を行う。2010年、2人の同僚と共にハバタク株式会社を東京都千代田区に設立。2011年にベトナム支社を開設し、ベトナムに赴任。

ハバタク株式会社ベトナム支社の事業



◎ベトナムでは今も燃料として炭を使用しているが、多くの炭は燃焼効率が悪く、排気設備が不十分な家屋では人体への悪影響が懸念されている。従来の燃料よりも燃焼効率が良

く、環境への負荷も少ない燃料がベトナムでも開発されているが、それをビジネス化するノウハウが現地にはない。そこで、日本の中高年層が持つ技術やノウハウを、日本の若者が媒介になって新興国に伝えるという事業モデルが構築された。



◎日本から参加したメンバーが、ベトナム人メンバーと「ビジネスを通じた社会貢献」などについて語り合う。「海外に進出するにはビジネスのアイデアも大切ですが、最後はやはり人です。日本のやり方をそのまま持ってくるのではなく、日本人との違いを認め、現地の人から学ぶ姿勢を大切に出来る人が成功していると思います」(小原さん)

り人です。日本のやり方をそのまま持ってくるのではなく、日本人との違いを認め、現地の人から学ぶ姿勢を大切に出来る人が成功していると思います」(小原さん)

などの新興国を舞台に最も注力をしている新たな事業は、社会革新に取り組む新興国の人々と、日本の中高年層、そして若者の3者が世代を超えてチームになって社会的な課題に取り組みむ、というものです。

ベトナムにも、ビジネスを通じて環境問題や都市問題の解決に挑戦したいと考える人は大勢います。しかし、例えば環境への負荷が少ない新製品を考案しても、それを効率よく生産し、流通させるビジネスノウハウを持つていないことが多々ありま

す。そうしたノウハウは、経験豊かな日本の中高年層であれば提供できますが、家庭を持ち、本業で大きな責任がある立場の彼らにはあまり時間がありません。そこで、フットワークが軽く海外に行きやすい日本の若者がノウハウを伝える媒介になり、新興国で新しいビジネスに取り組む体験を積む。国境と世代を超えて、立場の異なる3者がそれぞれ出来ることを行い、やりがいや経験を得意にしようというものです。

急速に成長を続けるベトナムです

が、だからこそ、新しい課題も数多く発生しています。かつて同じように経済成長を遂げ、そうした課題に向き合ってきた日本だからこそ、今、ベトナムが抱える問題の解決に寄与できるのではないかと、しかもそれを日本人自身にとっても喜びに出来る仕組み、それぞれの人が無理せず社会貢献できる仕組みがあるのではないかと……そう考えたのです。

前向きな気持ちで海外に足を踏み出してほしい

私は、海外でものを売ることだけがグローバル化ではないと思っています。知恵や思いやりの心で、外国の人と新しい価値を持続的な仕組みの中でつくり上げていく。日本人の強みを生かして、新興国の人たちの生活を物質的にも精神的にも豊かにすることで、お金を稼ぐことは別のやりがいや達成感を味わう……これは、日本人ならではの国境の超え方ではないでしょうか。

若者は、海外に出ることで日本の良さを再発見します。もちろん私もそうでした。自分を育ててくれた素

晴らしい国、日本に何か貢献したいという気持ちはどんどん強くなっています。また、海外で培った力や課題解決のモデルは、日本で生かすことも出来るはずです。グローバル化が進めば人材は循環すると、私は考えています。日本の若者にとって、世界を意識する必要性が生じているのは事実です。けれども、必要に迫られていることだけが世界に出る理由ではありません。人や文化との出会いなど、海外でしか味わえない感動がたくさんあることも、大きな理由になるはずです。

ベトナムのような新興国に身を置けば、日々成長する社会を実感できますし、資本のない若者でもチャレンジすることが出来ます。更に、物質的な豊かさとは別の、より人間的な幸せの価値観にも出会えるでしょう。日本のようにものは豊富になくても、家族との時間を楽しみ、笑顔で暮らすベトナムの人たちを見て、こういう生き方もあるのだと私自身、初めて気が付きました。今まで知らなかった新しい価値観や幸せの形、生き方の選択肢が見える可能性も海外にはあるのです。

「同じ人間」のために 国境を超えて 大切な命と向き合う

国境なき医師団 アドミニストレーター 辻坂文子



ハイチ、南スーダンの 人道援助に参加

非営利で民間の医療・人道援助団体である国境なき医師団(MSF)は、誰からも干渉や制限を受けることなく、国境を超えて危機に瀕した人々への緊急医療援助を行っている。2012年現在、世界28カ国に事務局があり、各国からの医師や看護師など約6500人の外国人派遣スタッフが、現地スタッフと共に70の国と地域で活動中です。人種や政治、宗教を問わない、独立・中立・公平の原則に基づいた援助活動が評価され、1999年にはノーベル平和賞を受賞しました。

私はこれまでハイチ、中央アフリカ、南スーダンなどでMSFのアドミニストレーターとして人道援助活動に参加してきました。アドミニストレーターとは、現地スタッフの雇用や給与の支払い、研修などの人事管理、プロジェクト全体の予算や経理などの財務管理を担当する役割のことです。MSFから派遣されるチームは、医師や看護師の他に、助産師や薬剤師、臨床心理士、更に、薬やワクチンなどの手配、水や食料の確保、診療所やトイレの建設などを担当するロジスティシャン、そして私のようなアドミニストレーターなどの外国人派遣スタッフで構成され、現地で採用したスタッフと共に活動を行います。

過酷な環境で行う 現地での仕事

12年5月から半年間、私は南スーダン共和国で、MSFの「母子保健医療プロジェクト」に参加しました。子どもと妊産婦の死亡率を下げするため、外国人派遣スタッフ約20人に加え、現地で200人以上のスタッフを雇いながら、200床以上の病院を維持しました。

現地の環境は過酷です。気温は日中50度に達する季節もあり、1日6

リットルの水を飲んでも体が渴いている状態です。食材が乏しいため、食事は5種類くらいのメニューが何カ月も続きます。現地の人たちと比べればはるかに恵まれた食事なのですが、私たち外国人派遣スタッフにとってはかなりつらいです。

現地で採用したスタッフを育成するのも簡単ではありません。内戦が長く続いた南スーダンでは、人々に教育を受ける余裕がこれまでなく、簡単な計算や読み書きが出来ないスタッフも多くいました。「仕事をする」「責任を果たす」ということの



つじさか・あやこ

◎1976年愛知県生まれ。愛知県立一宮高校卒業。慶應義塾大文学部卒業後、同大法学部に学士入学。フランスへの交換留学を経て、卒業後、国境なき医師団日本の広報部に就職。その後、退職し、青年海外協力隊としてベナンへ。イギリスの大学院で人道援助を専攻した後、国境なき医師団のアドミニストレーターとしてハイチ、中央アフリカ、南スーダンなどで活動する。

意味を理解してもらおうのに苦勞することもあります。

12年の南スーダンにはマラリアの流行期間が長く、3〜8月にMSFが入院させた子どもは1000人以上と、前年同期の3倍に達し、仕事量はおのずと多くなりました。MSFの方針として、私たちは週末の休みとは別に3カ月ごとに約1週間の休暇を取得することになっていますが、南スーダンの活動では、それが必要ならば心身共に健康な状況を維持できないほどでした。外国人派遣スタッフは職種に応じて定期的に入れ替わり、そして南スーダンのプロジェクトは今も続いています。

同じ人間として 自分に出来ることをしたい

任地での苦勞は相当なものです。それでも私たちが助けようとしている人たちのつらさとは比べものになりません。病院で栄養失調の子ども姿を見るたび、自分が何のためにここに居るのかを実感します。

私が世界の貧困や紛争に関心を持ったのは、中学生の時にインドネ

シアを旅行し、自分よりも小さな子どもが生活のために働いていることにショックを受けてからです。想像を絶する苦しみを目の前にして、自分も何かしたいという思いを抱き、大学卒業後、MSFの日本オフィスに広報として就職しました。

現地の様子を伝えるうちに、次第に私は、自分も現地で働いてみたいと思うようになりました。MSFが活動する国の多くは貧困、紛争や暴力といった問題を抱えています。そうした国で人々がどんな暮らしをしているのか、自分の目で確かめたいと思うようになったのです。一言でいえば、世界に対する好奇心です。

実際に活動して感じるのは、日本よりも貧しい国だから、人々はみな不幸かといえば、必ずしもそうではないということ。途上国の人たちが日本人には考えられないような環境で懸命に生きていくことに、私は素直に尊敬の念を抱きます。

しかし一方で、同じ人間なのに生まれた国が違うだけで、これだけ生きる境遇が異なることに強い憤りを感じます。私は日本にたまたま生まれたから、恵まれた生活が出来てい

国境なき医師団における 辻坂さんの活動



◎「日本には多くの社会問題に対して国が援助するシステムが存在しますが、地球上にはそうしたシステムが全く存在しない国もあります。MSFの人道援助の目的は、持続性のある解決というよりも、むしろ、今、目の前にある苦しみ、つまり死を減らすことなのです」(辻坂さん)



◎辻坂さんは、東日本大震災の被災地でもMSFのアドミニストレーターとして活動した。「正直に言うと被災した人たちに感じる思いは、海外の人に対して感じるものとは全く違いました。MSFの理念とは矛盾しますが、同じ国の人たちが家族や家をなくした様子を見た時、その悲しみに心から共感し、自分も当事者だと感じたのです」(辻坂さん)

写真上：◎MSF 写真下：◎Jun Saito/MSF

異なる意見に耳を傾ける力が 日本人にはある

べきだと思えます。

私は、自分の仕事を「自己犠牲」だと思つたことはありません。やりがいを感じるから続けているのです。自分が採用にかかわった現地スタッフが生きて働き働いているのを見る時に、大きな喜びを感じます。自分で望んだ仕事にかかわることが出来る私はとても幸せです。

ただ、価値観が異なる国で活動す

るのですから、援助を受け入れてもらえないこともあります。子どもの病気が治っていないのに、父親が西洋医学に対して拒絶感を示し、「こんなことをしても治らない」と言い出すこともあります。そんな時、私たちはそれぞれの社会の文化や風習を尊重するとしながらも、結果としてそれらを変えることを勧めているのか、あるいは、出来る限りの治療を行っていくのかと考えます。

同質性の高い社会に生きる日本人は、相手が同じ価値観を共有していると期待する傾向がありますが、それでは国際社会で異なる価値観に出会った時、どうすればよいのか分からなくなってしまう。

異なる価値観に対しては、お互いが「私はそうは思わない」と言い、その上で「どうして？」と聞き、考えを伝え合っていくことが大切だと思います。そのためには、自分と相手の差異に好奇心を持つことが必要です。そうして対話を続け、その時々目的に応じて、何を優先すべきかを一緒に考えるのです。

グローバル化する社会では、課題を解決するためには対話を続けるしかないと思います。外から見て「あのような考えは理解できない」と非難するだけでは何も変わりません。自分とは違うと思いつながらも、出来る限り尊重するしかないことも現実にはあります。高校時代からさまざまな価値観に触れることは、その土台づくりにつながると思います。

日本人は周囲の意見に迎合しがちだといわれますが、裏を返せばそれは「他人の話をよく聴く」ということであり、実際に海外では長所として評価されています。異なる価値観が向き合う現場で、人の話が聴けることは大切なコミュニケーション能力の1つです。普段、私は自分が「日本人」だと意識することはあまりありませんが、同僚から何でもないことに対して「文子は優しいね」と言われた時は、和を大切にしている日本の価値観が自分にも備わっているのだと感じます。日本人の特質を生かしながら世界に貢献できることはたくさんあると思います。

日本の小さな町での本物の交流が 多様な価値観を受け入れる グローバルな場になる

「ナガサキアイランズスクール・小さな世界学校」代表

小関 哲

長崎での教育旅行が 世界一の評価を獲得

「小さな世界学校」では、長崎県平戸島や小値賀島を舞台に異文化交流する研修旅行型の教育プログラムを企画しています。2007年、世界最大級の教育旅行組織「ピープルトゥピープル（PTP）」が国際親善のため、私たちのプログラムにアメリカの高校生約360人を派遣しました。2週間の日本滞在中、長崎県内で6日間を過ごすこのプログラムでは、彼らは美しい自然の中で漁や田植えを経験し、ホームステイをして日本の生活を堪能しました。更に、被爆者の体験を聞き、日本の高

校生や大学生と平和について語り合うなど、単なる観光とは一線を画す、「本物の日本」を体験しました。PTPはこの年、世界48コースに約2万7000人の学生を派遣しましたが、私たちが企画したプログラムは参加者アンケートで世界第1位の評価を獲得したのです。

世界、日本への貢献意識を高めた イギリスでの2年間

日本の市民、若者とアメリカの高校生が寝食を共にし、国際的な課題について話し合い、感動の涙を流す。私が企画したこのプログラムの源泉は、16歳の時に留学した国際学校 United World College (UWC)



おせき・さとし

◎ 1979年長崎県生まれ。16歳の時、長崎県立佐世保北高校を中退し、国際学校 United World College へ第25代日本人派遣奨学生として留学、Atlantic College (英国ウェールズ州) 卒業。京都大法学部を卒業後、平戸島・小値賀島などを拠点に、自然体験・異文化交流を取り入れた旅行型教育プログラムの企画を行う「小さな世界学校」を立ち上げる。

での経験にあります。

長崎県の平戸で育った私は、戦争の悲惨さを幼い頃から学校や家庭で学んできました。中学生になる頃は、友人と「どうすれば戦争がなくなるのか」を子どもながらに真剣に議論しましたし、社会科の授業で民主主義について学んだ時は、人間が重ねてきた歴史の重みに心から感動しました。日本の高校に進学しましたが、「若者の知性や感性、志を尊重し、若者が正義を前向きに追求する姿勢を育む教育を実現することなしに、より良い社会をつくることは出来ない」という考えが強まり、よりそうした環境を求めるようになって

たのです。その過程でUWCの存在を知り、取り立てて英語力があつたわけではない私は半年間、連日明け方まで英語の猛勉強を行い、奨学生資格を勝ち取ったのです。

UWCは、国際平和の実現に貢献するリーダーを養成する目的で、1962年に設立された国際教育機関です。毎年各国より数人〜数十人の若者を選抜し、奨学金を与えて世界12校のキャンパスで2年間の高度な国際人教育を提供します。世界の政財界人が理事職を務め、現名誉会長はネルソン・マンデラ氏です。私が学んだイギリス校は、12世紀の古城が校舎で、世界中からおよそ

350人の仲間が集まっています。世界の政治や経済など幅広いテーマについて、年齢や国籍の区別なく、時には夜を徹して語り合ったり、地域の消防・救急やNPO活動の第一線を正規の有資格者として担ったりするなど、学生は皆、若者らしい感性と理想主義を存分に発揮しながら、それぞれの興味・関心を追求していました。若者の知力、体力、社会的意識は、しかるべき環境に身を置けば伸びていくものなのだと身を以て実感しました。

恵まれた環境で勉強する中で、どの国の若者も「自分たちは世界中の暴力や貧困、差別と戦うためにここで学んでいる」という意識を強く感じていったと思います。ところが、帰国後の日本では、「世の中をもっと良くしたい」という意識が希薄に感じられることが多々ありました。人間は本来、誰でも人の役に立ちたいと思っている。しかし、今の日本人は、どうすれば人の役に立てるのかが分からなくなっているのではないかと。UWCのような学校を日本でつくりたい……教育に対する私の夢が次第に大きくなっていきました。

国境を超えて語り合うことで地域の価値を発見する

平戸・小値賀での教育プログラムは、私の夢である学校づくりにつながるものですし、事実、そこにかかわるさまざまな人たちに成長や変化をもたらしています。

日本の小学校を訪問したアメリカの高校生は、「集団の中で互いを思いやる文化が素晴らしい」と日本の教育の良い面に気付き、被爆者の体験から「資料館で見た被爆者の写真が、優しかったホストファミリーのおばあちゃんと重なった」と戦争の悲惨さを自分の問題として考えられるようになりす。

彼らを迎える日本人にも変化はあります。当初、「外国人にどう応対すればよいかわからない」と困惑していた町のお年寄りたちは、別れの時にアメリカの若者と手を取り合っで名残を惜しみ、再会を誓い合います。また、私たちのプログラムの運営の主力は、10代後半から20代前半のUWCの後輩らを中心とする若者ですが、日本人とアメリカ人学生を

「小さな世界学校」平戸島・小値賀島での教育プログラム



◎城下町の面影を今も残す平戸市、17の島々からなる人口約3千人の小値賀町を主な舞台に、異文化交流体験は行われる。小関さんが大切にしていることは「ありのままの生活の中にゲストを受け入れること」。実際、アメリカの高校生の心をつかむものは友情であったり、風景であったりとさまざま。将棋に興味を持ち、3日間の滞在中、ホームステイ先の「おとうさん」とずっと将棋をさしていた生徒もいたという。



◎アメリカの高校生と日本人の間をつなぐのは、UWCの後輩らを中心とする若者たち。「島の漁師とアメリカの高校生の心をつなぐためには、思い切った意識が出来るくらいの高い英語力が必要です。でも、その土台はやはり日本語です。感動をあえて別の言語で言うのですから、自分の中に感動の蓄積が必要です。だから、高校生には良い本を日本語でしっかり読んで、感動を蓄積してほしいですね」(小関さん)

橋渡しする彼らの活躍を見た地元の高中生・大学生が、その後、私たちの活動への参加を希望し、新たな有給スタッフとして活躍するなど嬉しい循環も起っています。私たちとの出会いを契機にUWCを目指し、合格した地元の高校生もいます。

今、私は、岩手県大槌町や陸前高田市など東北の市町村で活動する団体とも連携し、平戸や小値賀での成功ノウハウを東北の人々に伝える活

動も始めています。日本が震災をどう乗り越え、原発の問題にいかに向き合っていくのかについて、東北の人たちとの交流の中で海外の若者が学ぶ教育プログラムを、東北の人たちに引き継いでもらうためです。海外の若者にとっては、本物に触れ、心と心が交流する中で多くを学ぶ教育の場になるでしょうし、東北の若者にとっては、海外の人たちと語り合うことで、地域の価値を再発見す

る場になることを期待しています。

多様な価値観との出会いは地域にこそある

10代の頃、「世界の平和に貢献したい」と志した私が、現在長崎や東北の小さな町を拠点にするのは、世界に目を向けなくなったからではありません。むしろ深い人間関係を築ける平戸や小値賀でこそ、世界に波及させられる「本物のモデル」をつくれるという思いがあるからです。小さな町での暮らしには、時に都会以上に多様な価値観の中で生きる力が求められます。職種や世代、受けた教育や価値観などが異なる他者と極めて近い距離で生活する地域は、人を、多様な価値と共に楽しく生きることが出来る「マルチカルチャールな存在」へと育てる最良の土壌です。一方で、大都市のグローバル企業に勤務する人が、同じような環境で働く人とは付き合ってしまうのはよくあることです。

グローバル社会は、多様なローカ

ルの集合です。身の回りの人々の多様性を深く知ることこそ、世界に通用する国際人としての素養だと思えます。そう言った意味で昔ながらの生活が残る地域は、実は若者にとって優れた国際人教育の場なのです。

交通機関が発達し、今は国境を超えた移動が容易です。でも、そうした時代だからこそ、1つの場所で腰を据えて多様な人と付き合い、深めることを大切にしたいのです。もちろん、海外に行くことを否定しているわけではありませんが、海外に行きさえすればよいというわけではありません。大切なのはそこでの体験の質です。私の場合も、イギリス留学が良かったのではなく、UWCという学校での体験が良かったのです。平戸や小値賀の漁師の言葉、長崎の被爆者の壮絶な体験に、アメリカの高校生が真剣に耳を傾けるのも同じことです。日本の地域にも良質な体験が出来る場所はたくさんあります。そこに職業や年齢、国籍を超えて多様な人々が集まったとき、グローバルな学びが生まれるのです。

学校現場から 考える

グローバル化の現状を 教師がキャッチすべき

まず、グローバル化に対するお考えから教えてください。

渡會 日常生活の中で、地方の生徒がグローバル化を実感することはあまりありません。しかし、就職した卒業生に聞くと「今の時代、英語は不可欠」と口を揃えます。高校の中でグローバル化を実感しにくいのなら、卒業生など社会の現状を知る人の言葉を借りるなど、教師が工夫して社会の実情を伝えなければいけないと感じています。

藤澤 地方こそグローバル化の影響を直に受けるのだと私は思います。

日本人らしさを強みに 世界に生きる人材を地域で育てる

社会のグローバル化が進む中で、高校はグローバル化社会に必要な力をどう考え、人材の育成に取り組んでいくべきなのだろうか。主体的に世界に生きる3人のインタビューを踏まえ、山形と高知の若き英語科教師が語り合う。



「集団の力を最大限に引き出す
リーダーになれる可能性を
日本人は持っている」

T P P（環太平洋経済連携協定）の問題でも、最初に変化を迫られるのが農業であり、地方です。まず教師が世界の動きをつかむアンテナを持ち、それが自分たちの生活にどう影響するかを生徒に語る力を身に付けたいと思います。

渡會 本校の卒業生の多くは、大学卒業後、東京や大阪などの都市部で就職しますが、そこではきつと海外との接点が多い仕事や、多様な価値観の中で働く環境が待ち受けている

はずです。そう考えると、どのような環境でも活躍できる力は、地方の高校生ほど必要といえるのではないのでしょうか。また、地元地域に残るにしても、外に目を向ける力がなければ、地域の状況を深く理解することは出来ないでしょう。

藤澤 グローバル企業の採用枠を外国人学生と競うような学生だけでなく、地域にとどまる学生もグローバル化の中で生きていくことを意識しなければならぬと思います。

高知県・私立土佐塾中学・高校

- ◎設立 1987(昭和62)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約200人
- ◎12年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、筑波大、東京大、岡山大、高知大などに75人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理大、早稲田大、同志社大、立命館大、近畿大などに318人が合格。
- ◎住所 〒780-8026 高知県高知市北中山85
- ◎電話 088-831-1717
- ◎Web Site <http://www.tosajuku.ed.jp/>

山形県立米沢興譲館高校

- ◎設立 1886(明治19)年
- ◎形態 全日制/普通科・理数科/共学
- ◎生徒数 1学年約200人
- ◎12年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、山形大、福島大、筑波大、東京大などに149人が合格。私立大は、東北学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理大、早稲田大などに164人が合格。
- ◎住所 〒992-1443 山形県米沢市大字笹野1101
- ◎電話 0238-38-4741
- ◎Web Site <http://www.yonezawakojokan-h.ed.jp/>

高知県・私立土佐塾中学・高校

藤澤佑介

ふじさわ・ゆうすけ

教職歴7年。英語科。新任以来、同校に勤務。留学生の派遣と受け入れなどを担当する国際部部长。



山形県立米沢興譲館高校

渡會朋和

わたらい・ともかず

教職歴14年。英語科。新任以来、同校に勤務。1学年担任、英語科主任。

グローバル化社会に生きる人材像を問い直すべき

— 今回の特集では、グローバル企業に身を置くビジネスパーソンとは異なる方々をご紹介します。

渡會 そもそも、今後高校で育てるべき人材とはどのようなものなのか、私たちは突き詰めて考えるべきでしょう。「英語が話せて、グローバル企業に就職できる」といった表面的なことではなく、高知や山形のような地域にいても求められる、より普遍的な力を定義したいです。

藤澤 小原祥嵩さん（P8に登場）は、ビジネスにおいても日本人の思いやりや気配りが世界で評価されているとおっしゃっています。私たちは、そうした日本人としての強みを伸ばすこともっと意識すべきかもしれないですね。英語の授業などでは、自分の意見をしっかりと発信することに力点を置きがちですが、自分を主張することが出来ても、人の話をきちんと聞いて、相手の気持ちを大切に

にすることが出来なければ、無用な対立が生じるでしょう。日本人がこれまで大切にしてきた精神性こそ、これからの時代で大切なのだという気がします。

渡會 日本人は、日本人らしさを生かして世界で活躍できるのだと私も3人のインタビュー内容を聞いて思いました。私たちは、固定化された「グローバル人材」のイメージそのものを問い直す必要がある気がします。英語も、対立する相手をディベートで打ち負かすために身に付けるのではなく、差異を理解し、他者とながらための道具であってほしいです。そういうイメージを持つことが出来れば、人の話をじっくり聞ける日本人は、英語をうまく使いこなして、グローバルな人間関係を広く築くことが出来るかもしれません。



「どのような環境でも活躍できる力が、地方の高校生には必要」

貢献の意識は、学校の日常で育つ

— 海外に行く理由として、小

藤澤 辻坂文子さん（P11に登場）もおっしゃっていますが、人の話をきちんと聞くことが出来る日本人は、集団の力を最大限に引き出すリーダーになれる可能性を持っていると思います。個々のメンバーを支援することで集団の持つ潜在能力を最大限に発揮する「サーバントリーダー」は、グローバル社会でのリーダー像の1つとして生徒に教えたいですね。それによって、海外で異なる価値観の人たちとチームになって働くことの喜びや苦労が分かり、結果的に海外へ出ることへの心理的なハードルが下がるかもしれません。

特集

「主体性」の育成③

世界に生きる人材を育てる

をどれだけ演出できるかですね。
渡會 良質な双方向性を維持するのは、分かってもらおう、分かってあげたいという気持ちなのだということを生徒に実感させたいと思います。その上で、せっかくなら、もっと格好よく話したいと思うようになれば、その時、主体的な教科学習へとつながるでしょう。

一歩踏み出す突破力を 寄り添いながら育む

藤澤 内向きだといわれる最近の若者たちですが、日々生徒と接していると、彼らも自分の考えを発信したいし、自分と違う意見を聞きたいという欲求を持っていると感じます。デジタル環境が発達した今の時代はさまざまなコミュニケーション



「あきらめられない夢を
持つことが壁を
突破する力になる」

ルがありますから、工夫次第で一般の高校生でも海外とつながることが出来ます。授業でも、世界でリアルタイムに起こっている出来事に対して、海外の人々はどうか考えているのか、ツイッターの発言などを追いつけていけば、生徒と世界の距離は一気に縮まるでしょう。

渡會 確かにツイッターなどを指導に活用することには、さまざまなリスクもありますが、だからといって使わないとすぐに決めてしまうのではなく、どうすればうまく使えるかを考える時代になっていると思います。デジタル化のメリットを生かす工夫と勇気が教師に必要ですよ。
藤澤 高校で英語力を身に付け、さらに日本人としての豊かな精神性を高めることは確かに大切ですが、実際に一歩足を踏み出せる力、おもし

ろそんなことに飛び込む力も高校で身に付けさせたいですね。やってみよう、行ってみようと思う行動力は、実際にやってみておもしろかったという体験の積み重ねで身に付くものだと思います。私は、関心のありそうな生徒には海外研修の募集などを積極的に紹介しています。外へ出て行くことが特別なことではないという雰囲気を作ることが、生徒の背中を少し押してあげることが必要だと思います。

渡會 最近の生徒を見ると、確実に後戻りできるところまでしか行こうとしないような気がします。この道が正解かどうかは分からないけども、大きな夢を描いて壁を突破する力を身に付けさせることが大切だと私も思います。そのためには強い目的意識や、簡単にはあきらめられない夢の存在が必要です。それがあればもう一歩先に進んでみようという気持ちになるはずですから。少しずつでも先に進めば、夢が夢で終わらずに現実になることを、生徒と二人三脚で教えたいと思っています。



藤澤 海外研修などの鮮烈な体験で一気に変わる生徒もいますが、多くの生徒はゆっくりとしか変わりません。しかも、進んでは戻るのが繰り返します。自分の進める範囲、出来ることを少しずつ広げる生徒に対して、昨日よりも少しでも出来るようになったことや、挑戦しようとする姿勢を見逃さないで評価したいと思います。そうした教室での地道な積み重ねが、生徒の世界を大きく広げられると信じています。



◎1888年創立の尋常中学校と宮崎町大淀村高等女学校を母体として1948年に発足。「自主自律」を校是としたリベラルな校風を特徴とする。部活動は、カヌー部や歌留多部などが全国大会で上位入賞を果たしている。

設立

1888(明治21)年

形態

全日制／普通科・文科情報科／共学

生徒数

1学年約440人

12年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東北大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、広島大、九州大、熊本大、宮崎大、北九州市立大、宮崎公立大などに273人が合格。私立大は、上智大、明治大、早稲田大、南山大、同志社大、立命館大、関西学院大、西南学院大、福岡大などに延べ237人が合格。

住所

〒880-0056
宮崎県宮崎市神宮東1-3-10

電話

0985-22-5191

Web Site

<http://www.miyazaki-c.ed.jp/miyazakiohmiya-h/>

宮崎県立
宮崎大宮高校

学びの質の向上

量から質の指導に転換 生徒の主体性を育て 行くべき大学を目指す

変革のステップ

背景

◎宮崎県の公立高校入試が全県一区となり成績上位層が増えたが、大学合格実績が思うように伸びなかった

STEP 1

実践

◎生徒の主体性を育む「学びの質の向上」のための授業のあり方を職員研修で協議、実践

STEP 2

成果

◎「量より質が大切」という教師の意識改革が進む。生徒の主体性が伸び、大学進学実績も向上

STEP 3

生徒の学力の伸び悩みから
脱物量主義に舵を切る

宮崎県立宮崎大宮高校は、2010年度から「量から質への転換」を重点目標として、職員研修や課題の縮減などに取り組んできた。

宮崎県では08年度入試から学区制が撤廃されて全県一区となり、県内でも有数の進学校である同校には、以前にも増して成績上位層の生徒が入学するようになった。大学進学実績の向上が期待されたが、入学時の学力の割には実績は伸びず、3年生後半から模試の成績が急落するという例年の傾向にも変化は現れなかった。

「生徒は遅くまで残って頑張っている」「手を抜いているわけではないのに、なぜ成績が上がらないのか」。教師たちが自問した末にたどり着いたのは、量中心の学習指導の限界だった。進路指導主事の山崎慎一先生は次のように語る。

「宮崎県では、伝統的に圧倒的な量を課して生徒の学力を伸ばしてきました。朝課外や日々課題はもちろん、徹底的に量を与えることが、教科担任の力量であるという雰囲気さえありました。学区制廃止後も出来る限りの指導をしてきましたが、それは量に頼った指導の延長でした」

折しも、同校は08年度に創立120周年を迎え、1周を60年と考えると3周年となる。122年目の10年度に「サードステージ・プロ

「ジェクト」として学校改革を始め、その議論の過程で改革の軸に浮上したのが「量から質への転換」だった。教務主任の鬼束雅史先生は言う。

「生徒にとって教師から与えられた課題だけが勉強になってしまい、主体的に学ぶ習慣も能力も育っていないことが、学力の伸び悩みの原因ではないかと考えました。受動的な学習態度が固定化し、本来は『行くべき大学』を目指すべきところを、多くの生徒が『行ける大学』に進む結果になっていたので。プロジェクトの内容について議論する中で、生徒のより高い志望を実現させるためには、生徒の主体的な学習態度を育成する必要があります。そのためには学びの質を見直していくべきだ」という結論に達しました」



宮崎県立宮崎大宮高校
鬼束雅史 おにつか・まさひみ

教職歴26年。同校に赴任して12年目。教務主任。「集団の中での役割を自覚し、率先して行動できる人間に成長してほしい」



宮崎県立宮崎大宮高校
山崎慎一 やまさき・しんいち

教職歴28年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「生徒の持つ能力やその可能性を見逃さず、見付け出すことを心掛けた」



宮崎県立宮崎大宮高校
山崎俊一 やまさき・しゅんいち

教職歴16年。同校に赴任して7年目。研修部主任。文科情報科主任。「学ぶ楽しさを生徒たちと共有したい」

「数で勝負する時代は終わった」 教師の意識改革を断行

10年度にプロジェクトの内容が固まり、11年度に職員研修を担う研修部を設け、「量から質への転換」に向けた本格的な改革が始まる。

明確な方針が打ち出されたが、教師自身が高校時代に量をこなす指導を受けてきたこともあり、指導の方向性の転換は容易ではなかった。

「国公立大合格者数を重視した指導をと考えると、どんなに忙しくても家庭学習や課題などの量の確保を優先させてしまいます。そうした意識の強い先生方にとって、本校の方向転換は指導観を根底から覆すものです。量から質への転換の鍵は、先生方の意識を変えていくことにありました」（山崎慎一先生）

口火を切ったのは黒木正彦前校長だった。「これからは『行くべき大学』に挑戦させたい。国公立大合格者数が減るのは本質的な問題ではない」と説き、「数で勝負する時代は終わった」と明言。段正一郎教頭も「自分を変える勇氣を出そう」「自己変革の覚悟を持つてほしい」と繰り返し訴えた。このような思い切った改革は、校長が代われば元に戻るのではないかと不安を抱く教師もいたが、12年度に赴任した有枝定幸校長によって、改革は更に推進された。

研修部では、11年度に職員研修を4回実施し、質を高める授業のあり方について段階的に意識

改革を進めた。研修は次のような流れで行った。4月に行った1回目は、年度テーマである「質重視の授業のあり方」を提示し、3年生後半からの学力の伸び悩みは、生徒が与えられる指導に慣れてしまい、応用力が育っていないことに原因があるという仮説を示した。その上で質を高める授業の例として文科情報科の「探究」の指導法を紹介し、改善の方向性を提示した。「探究」は生徒自身がテーマを選び、学習計画を立てて実践する課題解決学習である。研修部主任の山崎俊一先生は次のように述べる。

「ベネッセの進学資料によれば、学習の質を高めるには、与えられた課題をこなすだけの習得型学習から、テストの失敗などから学ぶ定着型学習、更に予習を中心に自ら仮説検証を行う探究型学習へ発展させる必要があります。日々課題のような習得型の学習ばかりでは、学習内容の本質や考える力、難関大に対応する応用力は身に付きません。探究型の学習姿勢を身に付けられるかどうかが難関大に対応できるか否かの分岐点であり、『探究』の指導法がそのヒントになると考えました」

教師の不安を受け止めながら 対話型の研修で徐々に意識を変革

7月の2回目には、1回目で示した課題を踏まえ、国語、世界史、数学、物理、英語で研究

授業を行った。各教科で「質の高い授業」とは何かを考え、教科の代表1人が学習指導案を作成して研究授業を実施。その後、質と量のバランスについてグループ協議を行った。

10月の3回目では、6人1組のグループ協議や管理職と各主任によるシンポジウムで、これまでの成果と課題を検討し、校是である「自主自律」との関連を議論した。2月の最終回では、教師に意識調査を行い、個人・組織レベルで1年間を振り返り、グループで次年度に向けた展望を話し合った。

こうした議論の末、教科を問わず、これからの授業に求められる要素として、次の3点が提示された。①限られた授業時間を最大限に活用し課外や課題に頼らない、②教科の本質を学ばせるために学習内容を精選する、③知的好奇心を刺激して内発的動機付けを高める、である。

一連の研修により、教師の授業に対する意識は徐々に変わっていった。「量が増えれば生徒の理解度が深まり、学びの質も高まると思っていたが、そうではないと考えるようになった」「授業では答えを導き出す姿勢を大切にしたい」といった意見が寄せられた。教師同士が意見を出し合いながら徐々に意識を共有していく「対話型」の研修をしてきた結果だろう。

「生徒と向き合い、授業をするのは私たちです。一方的に方針を示すだけで完結するものではありません。先生方の意見を聞き、不

国語科指導案

国語科学習指導案	
単元名	評論 小浜逸郎『人はなぜ働くか』
目標	自己と社会との関わりについて深く考え、自分自身の考えを培うとする態度を育てる。 二項対立の論理構造を的確にとらえる。
指導要	本教材は「人はなぜ働くか」という問いに対して、二つの仮説に反論を行った後、自分の主張を展開する二項対立（「○○はAではなくBである」）を基盤とした文章である。生徒たちは、前田賢田清一の「要義としての身体」を読んだが、二項対立の論理構造をなかなか読み取れない生徒がいる。そこで、本授業では本文を読む前に「人が働くことの意味」について話し合いをさせ、まず筆者の論理展開を疑似体験させることから始める。そして、自分たちの考えとの差異を意識させながら本文を讀ませ（認識の相対化）、最後に本文の要約をまとめさせる。その際、単に本文の種小名（相似形）としての要約ではなく、論理の骨子である①「筆者の問語意識」、②それに対する「筆者なりの見解（主張）」、③その「主張を支える根拠」の3要素を意識させた要約をまとめさせたい。
学習材	・小浜逸郎『人はなぜ働くか』 ・ホワイトボード、ミニホワイトボード、マジック
学習指導過程	
学習内容及び活動	教師の支援
①「人がなぜ働くか」について自分なりの考えをまとめ、発表する。	・ブレンストレーミングの要領で自由な発想を促す。 ・筆者の想定した仮説①「人生を充実させるために働く」、仮説②「労働は美徳である」に関連するものがあれば、取り上げる。
②「人が働くことの意味」について、グループごとに分けて、検討させる。 1 仮説①「人生を充実させるために働く」の反論（2班） 2 仮説②「労働は美徳である」の反論（2班） 3 仮説①②以外の見解（2班）	・仮説①②以外の見解については、できるだけ多くの意見が出るように促す。 ・ミニホワイトボードを利用して、グループでの意見をわかりやすく簡潔にまとめようとするように指示する。
③テキストを読み、筆者の主張や論理展開を押さえた後、要約をまとめさせる。	・生徒の考えた意見の相違点を意識させながら、論理展開を押さえる。要約は下記の枠組みをします。 「人が働くことの意味は○○ではなく○○である。なぜなら○○だからである」
④筆者の論理展開と生徒が「探究」(学科独自の授業)でまとめた研究論文の書式とを比較させる。	・筆者の論理展開は、生徒たちが「探究」の時間でまとめた研究論文と同じで、裏根を追究する上で普遍的なプロセスであることを確認する。

2回目の研修で実施された研究授業の指導案。文科情報科の「探究」の授業をベースに、「問い→仮説→検証→表現」というプロセスを取り入れて、「人はなぜ働くか」という哲学的な問いについて考察する。
*学校資料をそのまま掲載

安や疑問を受け止めながら、少しずつ目線を揃えることが大切だと感じました」（山崎俊一 先生）

12年度は、他校の視察も積極的に実施。多くの教師が、課題や課外を伝統的に課さない高校を訪問できるように調整した。そして、2学期に有枝校長から「予習を前提とした授業への転換」や「日々課題や課外の削減」が提案された。

物語性のある単元構成で 生徒の主体的に学ぶ姿勢を育む

これらの取り組みにより、探究的な学習活動

を取り入れた、物語性のある単元構成が組み立てられるようになったと、山崎俊一先生は指導の変化を説明する。

「一方的に学習内容を伝達するのではなく、生徒からの疑問や意見を出来るだけ授業に取り入れ、そこから授業を組み立てることを心掛けるようになりました。生徒との対話を通して、学習内容の本質に迫り、思考力や表現力を育成するような授業です。この学習の流れの中で、身に付けるべき力を計画的に付けていくようにしました」（図）

模試の対策なども、これまでは単発的に行われていた。しかし、これらは一見、効率的・合

理的に学習できるように見えて、すぐに忘れてしまう。授業での学びの流れを途切れさせないためにも、模試対策は原則行わないことにした。模試の成績の下落は覚悟の上だったが、実際には、成績は例年とほとんど変わらなかった。

「質重視の方針とうまくかみ合った結果であり、教師にとって大きな自信となりました。授業の質を高めることにいっそう注力できると感じました」（山崎慎一先生）

課題の出し方も変わった。これまでは毎日課題を出して回収する「日々課題」が基本だったが、長期的スパンで課題を提示したり、授業の予習を課題にしたりして、生徒が部活動や他教科の学習とのバランスを考えながら計画的に取り組めるようにした。

「日々課題は習得型の学習が中心のため、こればかり続けていると考え方が硬直してしまい、多角的な思考を要する複雑な問題に挑戦する骨太の学力も粘り強さも育ちません。生徒が自分で学習状況を分析し、必要な活動について考える『自己教育力』を育成するために、主体的な学習に取り組ませることが大切だと考えています」（山崎俊一先生）

「大宮学びの時間」は 将来に向けた自分への投資

課外活動などの改革にも取り組む。まず、3

年生の放課後に授業の補完として実施していた放課後課外を選択講座制にした。国語は現代文と古典、化学は有機と無機というように分野別に講座を設け、更に難関大、センター試験などのレベル別の講座として、生徒が自身の目的に合わせて選択するようにした。

「生徒が自分の足りないところを見極める力を付けると共に、自ら選択することで主体的に学びに参画する意欲を醸成するのが狙いです」（山崎慎一先生）

月曜の7限目には「大宮学びの時間」を設け、生徒自ら学習内容を決めて取り組む「将来への投資の時間」と位置付けた。

「優秀な生徒に一律に課題を与えると、与えた分しか伸びない危険性があります。教師の指導に頼らなくても自分で考えて学習できる生徒が増えていることを私たちも自覚し、生徒の力を信じて、主体性を引き出していきたいと考えています」（鬼束先生）

授業で分からなかったところを先生に質問する、たまっている課題を終わらせる、探究的な調べ学習を行うなど、生徒が必要と考える学習に自らの判断で取り組ませる。時には、進路指導部が、2、3年生を対象に難関大講座を開くこともあるが、その間、教師は基本的に一切管理はせず、巡回指導も行わない。生徒へのアンケートでは、85%以上が「有効に活用できた」と回答しており、生徒の満足度は高い。

改革から2年が経過し、「量から質への転換」は徐々に教師に浸透していった。「探究」を導入した文科情報科では、課題であった3年生時の学力の下げ幅を抑えられるようになり、大学進学実績においても、東京大、京都大、難関大への合格者数も増えた。今後は、「探究」の授業理念を普通科にも広げ、予習を前提とした授業の推進、課題や課外の精選、校内模試の復活などを含めて、全体設計を進めていく考えだ。こうした学校の状況を、中学生や地域に発信していくことも課題である。近年、一部で、同校の改革について「宮崎大宮高校は放任になった」などと言われていることもあるからだ。中学生や保護者、地域の人々の誤解を招かないよう、中学校や塾へ同校の改革の意図を正しく伝え、自分自身の未来を切り拓く気概を持った生徒に志望してほしいと期待する。

「生徒の多くは、本校に来れば大学進学は何とかしてもらえという期待を持って入学します。しかし、未来を切り拓くのは自分です。本校がずっと大切にしてきた自主自律の精神の下、『行ける大学』ではなく『行くべき大学』に挑戦する気概や自ら学ぶ姿勢を育てていくのが、本校の目標です。教師自身も更に指導力を高め、正確な情報提供を心掛ければなりません。これからも、生徒が本校に来てよかったと思えるような指導を追求していきたいと思えます」（鬼束先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2012年10月号指導変革の軌跡「岩手県立盛岡第三高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



◎2010年に開校した小中高12年間一貫教育のための新しい学校。21世紀の世界を切り拓く豊かな「考動力」の育成を目指す。全員参加のシンガポール研修旅行や海外交流校との合同授業など、国際理解教育を推進。コンピューター室やマルチメディア教室などを活用したICT教育にも力を入れる。

設立

2010(平成22)年

形態

全日制/安全科学科/共学

生徒数

1学年約130人

12年度入試合格実績(現浪計)

なし(1期生の卒業は2013年3月)

住所

〒569-1098
大阪府高槻市白梅町7-1

電話

072-684-4327

Web Site

<http://www.kansai-u.ac.jp/senior/>

大阪府・私立
関西大学高等部

探究活動

探究能力と学力の 両面を追究する 新設校の挑戦

変革のステップ

背景

◎関西大を母体に、小中高12年間一貫教育を行うために開校。探究能力と教科学力の育成を目標に掲げる

STEP 1

実践

◎プロジェクト科目を軸とした探究活動、7時間授業、教師全員参加の模試分析会による学力向上策を推進

STEP 2

成果

◎探究活動を通して自ら考えて行動する生徒、高い志望を目指して頑張る生徒が現れ始めている

STEP 3

人材も設備も全て
ゼロからのスタート

関西大が小中高12年間一貫教育のための学校を開校したのは、今から3年前のこと。併設の中学・高校は既にあったが、小学校からの一貫教育は初めての試みであった。高等部は、普通科ではなく、「安全科学科」という専門科を立ち上げた。米津俊司校長は次のように語る。

「一貫教育を通して、急速に進む国際化や情報化、科学技術の発展に対応できる力を育むことが、本校に課せられた使命です。難関大進学に必要な高い学力と併せて、自ら課題を見付け解決していく『探究能力』を育むことが重要だと考えています。安全科学科としては、教科の枠を越えて探究活動を行い、大学で学ぶ基礎となる探究能力を身に付けることが狙いでした」

特徴は、私立大の付属校でありながら、難関国公立大に進学できる力の育成も目標として掲げていることだ。入試広報部長の近藤順之介先生はこう説明する。

「最終的な進学先がどこであっても、学校全体のレベルを上げようと思ったら、多くの生徒が成績上位となる必要があります。難関大を目指す生徒が増えれば、内部進学生も刺激を受けて、結果的に関西大に進む生徒の学力も底上げ出来ると考えています」

教員の確保、校舎の建設などは全てゼロから始めた。一般的に、付属校が設置される時は、他の併設校から教師が赴任して設立準備から運営までを担うことが多い。しかし、同校が取った方法は違った。「全く新しい学校をつくる」という方針の下、併設校の教師は参加せず、全国の学校から多様なキャリア、ノウハウを持った教師がスカウトされた。教科指導はもちろん、入試や進路、教務、探究活動、教育行政などの専門知識を持つ教師や職員が集まり、学校を一からつくり上げていったのである。小中高、そ



関西大学高等部校長
米津俊司 よねつ・しゅんじ
教職歴41年。同校に赴任して5年目。「21世紀の世界を切り拓く『考動力』豊かな人間を育てたい」



関西大学高等部教頭
鶴飼昌男 うかい・まさお
教職歴27年。同校に赴任して5年目。「誠実に生徒に接し、授業で生徒を鍛えたい」



関西大学高等部
辻勝也 つじ・かつや
教職歴28年。同校に赴任して4年目。教務主任。「我が子を通わせたいと思うような学校づくりをしていきたい」



関西大学高等部
近藤順之介 こんどう・じゅんのすけ
教職歴28年。同校に赴任して4年目。入試広報部長。「経験を事前に結果を予測できる人材を育てたい」

して大学までが入る13階建ての校舎が竣工し、10年4月、開校を迎えた。

探究活動の狙いは「THINK×ACT」

同校の教育課程で中心を成すのは、1年生から3年生5月まで行う「プロジェクト科目」(計7単位)だ。生徒が自ら課題を設定し、調べ学習や実験などをし、最終的に卒業論文に結実させる。教務主任の辻勝也先生は次のように語る。

「関西大は、自律的かつ積極的に行動する『考動力』の育成を目標として『THINK×ACT (シンク・バイ・アクト)』というキャッチフレーズを掲げています。自ら考えて動くことが出来れば、危険も事前に回避できますし、人の気持ちを考えて行動すれば、よりよい人間関係が築けるはず。本校の探究活動の狙いも、まさに『THINK×ACT』の一言に集約できると思います」

1年生前期では、探究活動を行うためのスキルを身に付ける。パソコンを使ったデータ処理、プレゼンテーションやディベートの方法、ブレインストーミングやKJ法などの思考法、文章の要約や引用のルールといった論文の書き方など、幅広く学ぶ。

1年生後期からはグループ研究が始まる。自然科学、社会科学、国際理解、総合の4系列に

分かれ、それぞれ少人数の「ゼミ」を組んで共同研究を進め、1年生の最後にプレゼンテーションソフトを使い発表する。

ゼミは、生徒が個々に決めたテーマの内容が近い者同士を集め、4〜6つのグループをつくる。例えば、自然科学系列なら、環境問題をテーマにした6人、化学に特化した4人がそれぞれ1つのゼミとなり、研究から発表までを行う。

2年生では、1年生の成果を踏まえて更に内容を掘り下げたり、軌道修正したりしながら、引き続き研究を進める。研究方法も、専門性の高い文献を調べたり、関西大の教授に話を聞いたり、後期に中間発表を行い、生徒一人ひとりが1万2000字の卒業論文に仕上げる。

3年生では、5月の卒業研究発表会に向けてプレゼンテーションソフトで研究内容をまとめる。クラスごとに予選会を開いて優秀作品を選び、大学教員を審査員とした本大会を開く。

探究活動で視野を広げ 志望学部へのミスマッチを防ぐ

探究活動では、教師はあくまでアドバイザーに徹する。テーマ設定から発表までを生徒自らが言い、成果物に教師が手を入れるようなことはしない。また、通常の教科学習に支障が出ないよう、探究活動は授業時間内に完結するよう

に指導している。生徒には、授業内で終わらせるための集中力が求められると共に、通常の学習との気持ちの切り替えの仕方学ぶ。

研究テーマは、基本的に1年生で決めたテーマを最後まで研究し通すよう、指導する。研究の不備や関心の変化に応じて、多少変更することはあるが、1年生で決めたテーマを発展させる形で2年生、3年生へとつなげていく。鵜飼昌男教頭は次のように述べる。

「1年生から同じテーマを追究していると、自分の興味・関心だけに偏り、かえって視野が狭くなると思われるかもしれませんが、実際はその逆です。1年生の発表が終わった時点で、本当にこのテーマで続けていくのかを生徒に投げ掛けます。また、テーマが矮小にならないように、教師が隣接分野に目を向けさせるなどのアドバイスをして、自分で決めたテーマを土台として視野を広げていく中で、いろいろな学問や社会事象との関連が見えてくるように仕向けています」

研究発表会では、大学教員から厳しい質問が投げ掛けられることもある。12年5月に行った1期生による発表会では、初めての大舞台を終えた安心感から、泣き出す生徒もいたという。予想以上の研究レベルの高さに、大学教員もつい本気になって厳しい意見を投げ掛けたのだ。

テーマ設定や論文作成など、生徒にとっては試行錯誤の連続となるが、この経験は大学・学

部の選択に生きると、教師は確信している。

「卒業論文を仕上げた時点で、自分はこの分野に向いていないと分かれば、学部選びを軌道修正できます。すなわち、大学進学後の学部ミスマッチを未然に防ぐことが出来るわけです。学力や偏差値だけの進路指導、根拠の不明確な興味・関心に偏った学部選びではない、確信を持った進路選択を後押し出来るよう、進路指導との連携を強化していきたいと考えています」(鵜飼教頭)

中高の全ての教師が参加する 模試分析会

探究能力の育成と並ぶ2つめの柱が、国公立大学合格を見据えた教科学力の育成だ。

まず留意するのが、学習量の確保だ。毎日7時間の授業や、生活学習計画表による自宅学習の促進に加え、夏・冬の長期休業中には3教科の補習を行う。教科学力は大学入試だけではなく、探究能力を高めるためにも必要だと、辻先生は指摘する。

「本校では、1年で学習のスタイルを固めたいので、あえて詰め込みをします。詰め込みという悪いことのように捉える向きもありますが、1年生では徹底的に知識を詰め込み、2、3年生でそれを運用・応用していく力を付けていけば、探究活動にも広がりが生

まれ、結果的に生徒の探究能力を伸ばすことにもつながります。1年生で基礎・基本の全てを習得できるわけではありませんが、13年度以降は中高が接続することもあり、一貫校の利点を生かして、知識の運用や応用に時間を掛けられるようにしていきたいと考えています」(辻先生)

全ての模試結果の分析を、中等部・高等部の教師全員で行っているのも、同校の特徴だ。高等部で実施している進研模試とスタディーサポート、および中等部の学力推移調査について、結果が出る度に中高の教師全員が集まり、生徒の学力状況や課題を共有する。

停滞している教科があれば、皆で原因を探り、その結果を基に教科団で学力向上策を検討し、方針を提示する。成績が良くない生徒に対しても同様に、学力の伸び悩みの原因を探り、担任が面談で助言できるよう、皆で知恵を出し合う。中高の教師が一堂に会して情報を共有するのは、将来的に6年間一貫で学年団を持ち上げる体制をつくるための布石だと、米津校長は説明する。

「現在、教師の受け持ちは、過去の勤務経験に従って、中学校経験者は中等部、高校経験者は高等部としています。中学校の先生は大学受験についての知識がありませんし、高校の先生は、思春期特有の課題を実感できません。いきなり異校種を受け持つともうまく

いかなので、模試の分析会を通じて、6年間の生徒の様子を見通すことが出来るようになるかと考えました。大学入試はどうなっていくのか、中等部の成績は高等部の教師から見ても満足いくものなのかといったさまざまな視点で議論をしながら、課題意識を共有することを大切にしています」(米津校長)

第2クールの課題は 中等部や大学との連携

開校から3年目を迎え、13年3月には高等学校から入学した1期生が卒業する。出来るだけ多くの生徒が国公立大に合格するように支援することが、当面の目標となる。

現在までの成果としては、まず学力向上が挙げられる。3年生の入学時の学力は、新設校ということもあり、他の併設校に比べて低かったが、3教科はほぼ同じ水準まで上がった。また、3年生の中には、他の生徒と違う課題を教師に求めてくるなど、自ら自分の弱点を見付けて克服しようとする姿勢も見られるようになった。関西大への内部進学だけが進路ではないという意識を持ち、更にも上を目指す生徒が現れたのである。

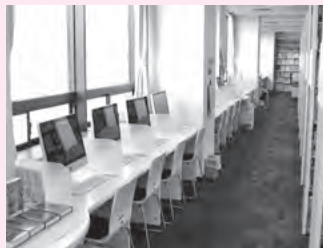
探究活動の成果と考えられる生徒の変容も見られる。生徒同士で何かを考える時、ブレインストーミングなど、プロジェクト科目で学んだ

方法を使って、解決策を模索する姿が見られるようになった。シンガポールへの海外研修旅行の班別活動で日本大使館を訪れた生徒は、「なぜシンガポールは多宗教なのに治安が保たれているのか」といった鋭い質問を投げ掛けて、大使館の職員をうならせる場面もあったという。新しいことをどんどん吸収しようとする生徒の意欲の高まりを、教師はひしひしと感じている。

13年4月には、いよいよ中等部で3年間を過ごした生徒が高校1年生となる。今後の課題の1つは、中等部や大学との連携を更に進めていくことにあるという。

ICTの活用

探究能力と教科学力の育成という大きな目標を支えるツールとして、同校ではICTの活用にも力を入れている。図書室やマルチメディア教室には多くのパソコンが配備されており、いつでも生徒が自由に使えるようになっている。探究活動の調べ学習や論文作成の時期には、図書室やマルチメディア教室がパソコンを使う生徒であふれるという。また、中等部ではインターネット電話を使って海外の提携校の生徒と交流したり、海外留学をしている同級生と情報交換をしたりしている。

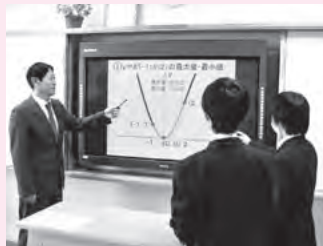


パソコンが配備された図書室

各教室のホワイトボードの裏には、パソコンに接続された電子黒板が常備されており、いつでもインターネットやデジタル教材にアクセスできる。変化のあることを説明する機会が多い数学や物理、化学などでは、その変化をアニメーション機能や動画で見せることにより、また、資料の提示が多い生物や日本史、世界史などでは、インターネットから得られる豊富なコンテンツにより、教科に対する理解が深まるという。



マルチメディア教室



電子黒板での指導は日常的に行っている

「開校から3年間の第1クールで、ひとまず本校の指導スタイルが形づくられました。中等部からの内部進学学生を迎える第2クール以降は、探究活動を中心に中等部と重複している活動を整理するなど、主に1年生の活動の質を更に向上させようと考えています。また、付属校としての立場を生かして、今以上に関西大との連携を深めていきたいと考えています。内部進学を目指す生徒の学びのモチベーションを高めることで、更に充実した活動が展開されることを期待しています」(鶏飼教頭)

30代教師の転

起
んでも
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



6年間を見通した指導体制で 生徒の英語運用力向上を目指す

私が乗り越えてきたもの

英語学習への生徒の意識の違い

私は33歳の時、愛知県内の別の私立高校から、中高一貫の私立南山高等・中学校女子部にやって来ました。

前任校では国際コースを担当し、生徒に英語でディベートをさせたり、レポートを書かせたりと、学んだ英語表現を使わせる機会を授業中に多くつくっていました。生徒は「英語が話せるようになりたい」という熱意が強く、私が英語で問い掛けると、それに対抗するように英語で答えてくれました。ところが南山高等・中学校女子部では、私が英語で問い掛けても生徒の反応は薄く、単語や文法の知識は吸収し

愛知県・私立南山高等・中学校女子部

糟屋 徹先生 36歳

ようとするものの、実技として英語の運用力を高めようという生徒は少ないようでした。前任校の生徒との英語学習に対する意識の違いを感じました。

私が音読する声だけが響く授業

私は、生徒の関心を英語の運用面に向けようと努めました。私は自らの英語習得経験から、「英語力向上に必要なのは、音読を基本とするトレーニングだ」と生徒に伝え、英文を繰り返し音読させる授業を展開しました。表現力を付けさせるために、英語のスピーチ、自由英作文なども授業に取り入れ

高3生の生徒を授業に引き付けられなかった

ました。2年目に受け持った中3生は、特にこのスタイルによくついてきて、授業での反応も大変良く、私は自分の指導に手応えを感じていました。着任3年目で初めて高3生を担当した時も、受験学年だからといって指導を変えらるつもりはありませんでした。持ち上がりではなかったため、まずは英語を声に出すことの意義を説明し、音読中心の授業を開始。4月は音読する生徒の声も大きく、私は自分の指導がうまくいくと思っていました。しかし、1か月ほど経った頃から、生徒の声は日に日に小さくなっていき、多くの生徒が明らかにトレーニング中心の授業形態に拒否反応を示していることが分かりました。



かすや・とる ◎教職歴9年。同校に赴任して4年目。担当教科は英語。中学1年生担任。
私立南山高等・中学校女子部 ◎全日制/普通科
女子校。12年度入試では、国公立大は、北海道大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに83人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ465人が合格。

そして、これからも挑み続ける目標

受験指導に方針を転換するも……

生徒は音読をせずに何をしているのかと、うつむいている生徒一人ひとり
を注意してみると、彼女たちは皆、塾
や予備校のテキストに取り組んでいま
した。「受験の役に立たない授業なん
か、聞きたくない」という無言のメッ
セージを突き付けられた思いでした。

自分の指導が生徒に拒否されている
ことが明らかである以上、方針を転換
せざるを得ません。私は音読中心の授
業をやめ、入試問題演習を行うよう
になりました。演習後には、英文の構造
を分析し、文法事項をじっくり解説し
ました。その結果、内職をする生徒が

いなくなつてホツとしたものの、「こ
れで生徒の力を伸ばすことになるのだ
ろうか」という気持ちは残りました。

センター試験が終わり、国公立大個
別学力試験に向けた勉強が本格化する
と、何人もの生徒から自由英作文の添
削を頼まれました。全員が難関大を志
望しており、センター試験の英語で満
点を取った生徒も何人かいました。し
かし、どの答案を見ても、決して整っ
た英文ではありません。彼女たちは、
大学入試には対応できたとしても、英
語で自分の考えを十分に表現できるよ
うにはなっていないのです。そう
なることを漠然と感じていながら、た
だ受験対策しか出来なかったことに、

私は自分の無力さを感じました。

英語の運用力を高めるための試作

大学受験のためだけでなく、大学合
格後も生かせる英語力の素地をつくる
責任も、高校教師にはある。私は改め
てその思いを強くしました。しかし、
自分の気持ちをぶつけるだけでは、生
徒はついてきてくれません。英語の運
用力を高めることで、入試問題を解く
力も付くと身をもって感じさせてこ
そ、生徒の心は動かせるのです。

中高一貫の6年間で、いかに早く生
徒の英語運用に対する意識を高め、段
階的に力を付けさせるか。指導に掛け
られる時間は十分にありますが、1人
の教師が6年間教え続けるわけではな

英語運用力の習得と志望進路実現の両立を目指して

いので、英語教科団で一貫した指導方
針を共有しなければ、生徒の混乱を招
くはず。そうならないために、私
は6年間の「Can-doリスト」を試作し
ました。生徒の発達段階に応じて付け
させたい力と、そのためにどのような
指導をするのかを、高3から逆算して
考えていったものです。最近では、こ
れを英語科の先生方と指導について話し
合うための叩き台としながら、自分の
指導にも反映させています。

生徒の志望進路実現という責任と同
時に、英語を使いこなせる人材を育成
するという責任を、英語教師は社会に
対して負っています。そうした社会貢
献を果たせる英語科を先生方と一緒に
作りたいと思っています。

糟屋先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒に英語での表現力を付けさせる
ために、授業でどのような工夫をして
いますか？

A 表現力の土台となるのは、語い・文法、
そして読解力です。そこで私はまず、生
徒たちに徹底的に音読をさせます。音読という
トレーニングを通して、英語を英語の語順のま
ま処理・解析する回路を頭の中に作り上げる
ことができ、その回路を通してインプットされたも
のが自らの表現力の下地になるのです。

表現力の直接的な指導としては、英語によ
るスピーチ、自由英作文などに取り組みせてい
ます。テーマは生徒の発達段階に応じて変えま
すが、中学1年生を担当している2012年度は、
「10文自己紹介」「好きな人・物紹介」とい
ったテーマです。また、楽しみながら英語に触れ
られるように、友だち同士でチャットをさせるこ
ともあります。その際、「Yes」「No」で答えるだ
けでなく、その理由も答えるように伝えています。

Q 表現力がどの程度付いたかを生徒自
身に実感させる機会は、どのように
つくっていますか？

A 学期末に、私と1対1の英語インタビュー
テスト、クラスメートの前で英文スピーチ
をするパフォーマンステストという2つの実技テ
ストを必ず行っています。インタビューテストでは、
ただ質問に答えさせるだけではなく、私に質問
させたり、それをレポートにまとめさせたりします。
授業で学習した表現が実際に使えるようになって
いることに気付かせ、「話せる喜び」を感じさ
せようという狙いです。学年末には2分間のイン
タビュー、1分間のスピーチに取り組みさせます。

メッセージを お寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す糟屋徹先生へ
メッセージをお願いします。同じ課題を抱えて
いる同世代の先生の共感の言葉、独自の授業
スタイルを確立された先輩からの応援やアドバ
イスなどを自由にお寄せください。編集部より、
糟屋先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスに
メッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

3年生の実績データを活用し 新課程での合格ストーリーを描く

時期の特徴

3年生の受験結果が出るこの時期、全ての生徒の進路が決まるまで受験指導や進路指導を丁寧に行いつつ、次年度以降の指導に生かせるリアルなデータが収集できる。

指導のポイント

再現答案や受験直後の生徒の生の声から合否の要因を分析して、自校の指導の強みと弱点を共有した上で、新課程入試で自校の強みを生かす指導の流れを構想する。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

目的別データ活用

1 再現答案で 自校の合格者像を リアルに伝える

……→ 図1

◎先輩の体験談などは生徒にとって説得力を持つ指導ツールになるが、中でも合格者の再現答案は市販問題集の模範答案以上に生々しく入試の緊張感を伝える良い材料となる。学校全体の財産を蓄積する意味でも、再現答案の作成を出来るだけ多くの生徒に依頼したい。出題された問題、自分が本番で書いた答えと、自分の予想得点率を記入してもらおう。記入時点で自分の解答が誤っていることに気付いても、入試本番に書いた答えをそのまま書かせる。答案から合否の分岐点を読み取ることが出来れば、生徒はもちろん教師にとっても有益な資料となる。

2 粘り勝てた道のりを 後輩に示す資料を 校内固有財産とする

……→ 図2

◎合格のポイントは高校生活のどこにあったのか、受験生自身が振り返り、生の声で後輩に伝えるシートにはインパクトがある。模試の判定がA、B判定で合格した生徒の振り返りからは「どのような高校生活を送れば好判定が得られるのか」を、C、D、E判定で合格した生徒からは、「最後の巻き返しのカギは何か」を学ばせたい。図2を各クラスで生徒に閲覧させ、今後の学習や生活に取り入れたい点を整理させた上で、面談で具体的取り組みを確認する。また、次年度に各学年で担任を務める教師にとっては「自校の生徒の強みや弱点」を知るヒントになる。

対生徒 への データ

受験直後の3年生に協力を求め、
合格のポイントを次年度へ引き継ぐ

データを用いた指導の流れ

STEP 1

◎受験が終了した3年生に再現答案と、3年間の振り返りシートの作成を依頼する (図1、2)

STEP 2

◎再現答案は、主に次年度の3年生と学年団のための資料として引き継ぐ

STEP 3

◎振り返りシートは、1、2年生にも閲覧させ、合格までの道のりを長い視野で見通すよう促す

STEP 4

◎振り返りシートは、どのようなことが合格の要因になったのかを生徒に分析させ、面談などで具体的な行動へつなげさせる

図1 3年生が作成する再現答案



大学・学部・学科名 / A大学 理学部数学科 (前期)		教科名 / 数学
大問1	$a^2 - a = a(a-1)$ a は奇数より $a-1$ は偶数となる また、 a と $a-1$ は互いに素であり、	予想得点率 100% 50 0
大問2	$\triangle ABC$ において余弦定理を用いると $AC = 5^2 + 4^2 - 2 \cdot 5 \cdot 4 \cos 120^\circ$ ここで $\cos 120^\circ = -\frac{1}{2}$ より、	予想得点率 100% 50 0
個別学力試験 教科別得点率 数学 (70%) 理科 (45%) 英語 (60%)		センター試験得点率 (合計) (70%)
■入試を終えての感想 ほぼ例年通りの出題。予想は60%にあと少しだった。		

図2 合格のキギを考えるための振り返りシート



合格大	B 大学 法 学部 法律 学科			
最後の模試の判定	模試名 (10月進研模試) 判定 (D)			
センター試験得点率	国語 (73%) 地歴 (70%) 公民 (68%) 数学 (56%) 理科 (61%) 英語 (76%)			
個別学力試験得点率	国語 (55%) 地歴 (60%) 数学 (55%) 理科 (なし) 英語 (65%)			
合格の要因 (やっておいてよかったこと)		学習面	生活面	進路選択面
	1年	定期考査の見直し	部活がバシだった	未定のまま
	2年	本気で授業を覚悟	キャンプなどで	志望校に決めた
	3年	模試の見直し	インターハイ出場後	判定は厳しいが
反省点 (やっておけばよかったこと)		学習面	生活面	進路選択面
	1年	進度が速く、時間が	部活中心でバタバタ	もっと早く大学調性を



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

「後輩のために」を学校文化として根付かせる

不合格となった生徒に再現答案や不合格体験記の作成を依頼する学校も存在する。志望大合格がかなわなかった3年生が後輩のために自由登校期間や卒業式後に学校に行き、自分の体験を綴るのは、自身もそうした学校文化の中で育ててもらった自覚があるからだ。入試対策の資料としてだけでなく、学校の求心力を高めるものとして継続的に取り組みたい。

数年を掛けて大学別答案ノートを作成

志望者が多い大学は、「〇〇大再現答案ノート」として蓄積する。これを4月からいつでも学級で見られるようにしておけば、志望大の合格に向け、何をどうしていけばよいか入試科目別にイメージできる。なお、生徒が書いた答案をそのまま紹介するか、教師が朱筆を加えた上で紹介するかによって、ノート活用の際の生徒への声掛けも変わってくる。

合格最低点を示すことで心理的ハードルを下げる

合格者平均点と最低点のどちらを意識するかで、合格へのハードルの高さは大きく変わる。再現答案で3年生に予想得点率を記入してもらい、また志望大の合格者度数分布を担当が紹介することで、高得点を収めていなくても合格している先輩の存在を生徒は知るだろう。入試を過度におそれずに、1歩1歩計画的に合格に近付くような意識を持たせたい。

目的別データ活用

1 自校の生徒の振り返りから指導の強みと弱点を総括

……→ 図3

◎収集した再現答案や振り返りシート、更に各種データは、生徒向けに活用できることはもちろんだが、これを教師が分析することで、生徒の実情を詳細に把握でき、次年度以降の強化ポイントが見えてくる。年度末の3学年団の学年会議では、3年間の模試推移や校内で実施した各種調査、そして生徒が作成した再現答案や振り返りシートを基に、自校の指導の強み、弱点を教科ごとに洗い出す。新しい1学年団にとっては、新課程生の学力特性や新課程入試で求められる力と照らし合わせることで、より自校の状況に合った3年間の指導計画を立案するためのよりどころになる。

2 模試の判定別に必要な指導を分析し、3年間の指導を描く

……→ 図3

◎高い目標を諦めない生徒が増えるほど、「D、E判定から巻き返せる」「合格最低点に滑り込める」生徒を育てる指導力が必要になる。最後まで諦めずに、学力も向上するのはどのような生徒か、自校の中で必要条件を吟味することにより、その指導の糸口が見えてくる。D、E判定から巻き返した生徒の生活データや再現答案を材料に、学年団でブレインストーミングなどを行い、合格できる生徒像を練り上げる。そうして求める生徒像とそうした生徒を増やすための指導を言語化しながら、3年間の合格ストーリーを肉付けしていきたい。

対教師
への
データ

3年生の振り返りを踏まえて
新課程での合格ストーリーを設計する

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎受験時の再現答案、これまでの学習の様子などから、学習面、生活面での合格のポイントを分析・整理する(図3)	◎併せて、中学校で新課程を経てきた新入生の特徴、新課程入試で求められる力などを整理する(図3)	◎特に、3年生後半から大きく巻き返して合格した生徒について、その特徴や必要な指導を学年団で検討する(図3)	◎STEP1~3の分析結果と自校の指導シラバスを踏まえ、次年度の1学年団が3年間の指導の流れをイメージし、共有する(図3)

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトをご覧ください。

- 2006年4月号「入試結果データの見せ方」
- 2008年4月号「1年生を高校生にする意識付け」
- 2010年2月号「次年度につなげる総括・引き継ぎと3年生からのデータ収集」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用 クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

加工可能な資料が
ダウンロードできます!

生徒指導・
進路指導ツール集

ウェブサイトから
ダウンロード!

●模試結果、再現答案から見える自校の指導の強み、弱点				
国語	・強み ・弱点	●合格した生徒の像については、「提出物をきちんと出す」「遅刻がない」「学校行事にも熱心である」「センター試験前でも授業に出ている」など、成績だけでなく行動面についても詳細に言語化する。このことが次の学年団にとって「当たり前の指導を教師全員が徹底する」ためのよりどころになる。		
数学	・強み ・弱点			
英語	・強み ・弱点			
●合格した生徒の特徴／日々の学習（自宅学習、課題提出）、学力（評定、模試）、学校生活（生徒会活動、部活動）などより				
●新課程新入生の特徴予測と、新課程入試で求められそうな力				
国語	・強み ・弱点 ・新課程入試で求められそうな力	●新課程では、どの教科でも言語活動が重視され、さらに、新しい分野が加わった教科もある。このような新課程の狙いや新たな分野への対応を指導に具体的に組み込んでいくことが必要であり、シートに言語化をすることは、その準備の確認にもなる。		
数学	・強み ・弱点 ・新課程入試で求められそうな力			
英語	・強み ・弱点 ・新課程入試で求められそうな力			
●第1志望合格者を増やす手立て（12年度結果より 判定値は〇〇模試）				
A判定	B判定	C判定	D判定	E判定
24人合格/28人中	42人合格/56人中	41人合格/80人中	31人合格/104人中	22人合格/132人中
この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導		この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導		この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導
●新課程1期生として、各学年で最優先する指導軸				
	1年生	2年生		
学習				
生活				
進路指導				

●模試判定をさらに吟味していく姿勢を学年団で共有するため、「第1志望合格者を増やす手立て」も大いに語り合いたい。判定が良いのに不合格となった生徒がいる場合、教師の入試直前のケアは十分だったか、またE判定の上位者に対して「合格まで何点必要か」を具体的に示したかなどを検証したい。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け） > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

模試判定と合否結果のズレにこだわる

模試判定で良好な結果を出していても不合格となる生徒もいれば、最後まで判定はふるわなかったが見事に合格を勝ち取る生徒もいる。そのような判定と結果のずれを「運」で片付けることなく、なぜそうした結果になったのか、受験指導の内容やプロセスを分析したい。それにより、次年度以降、より精度の高い教科指導とメンタルケアが可能になる。

模試判定の捉え方を学年団で再確認する

模試判定は受験において1つの大きな指標だが、判定値を一面的に捉えないようにすべきだ。10月の記述とセンター模試のドッキング判定の場合、10月の記述の結果が悪ければ、決して総合判定で良い結果は出ない。また、同じ「C」判定であっても、度数分布上の開きは大きい。「C判定の生徒」とまとめずに、学力状況と合格を可能にした要素を丁寧に見たい。

不合格の要因を分析し1年後の再挑戦に生かす

不合格となり、浪人が決まった生徒に対しては、何が足りなかったから不合格だったのかを分析し、1年後の再挑戦のために生徒に伝える必要がある。同じような難易度の大学でも、出題傾向や配点はその生徒と合っていなかった場合もある。学びたい学問や就きたい職業など将来の目標を貫きながら、合格の可能性を高められる方針を最後に示したい。

未来をつくる大学の研究室

最先端の研究を大学の先生が誌上講義！

42

統計解析にコンピューターを活用し 数百年に1度の大規模洪水を予測

京都大防災研究所 たからかおる 寶馨研究室

水文学は地球上の水循環について研究する学問で、その成果は水資源の活用や治水計画の策定、環境問題の解明・改善などへの応用が期待されている。京都大防災研究所の寶馨教授は、独自の手法で100~200年に1度は起こるといわれる大規模洪水を予測する方法を編み出し、それは全国の河川の治水計画に利用されている。現在は、理学や工学、農学などの大学院・研究所と共同で、地球規模の気象・環境問題について研究する「生存科学」を展開し、人類的課題の解決に挑んでいる。

フローチャートで分かる寶馨研究室

大学院生の 主な出身分野

- 工学
- 理学
- 地理学
- 気象学
- など

◎研究者の出身分野は、工学、理学、地理学、気象学などの理系が中心だ。クロアチア、マレーシア、インドネシア、韓国、ラオス、ベトナム、中国、ブラジルなどからの留学生もいる。

研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎水文学は自然界における水の流れを研究する学問だ。水問題の解決や水災害の予測には、気象学や気候学、地理学、地形学、更には人間の文化や思想など、「天・地・人」にかかわるあらゆる科学の知見が必要であり、研究でもそうした分野と連携しながら進めている。

研究成果と 社会のかかわり

- 災害予測
- 政策提言
- 啓蒙・教育活動
- など

◎環境問題や災害など、人々の暮らしや生存にかかわる諸課題を追究し、国や地域に応じた政策提言を行う。フィールド研究を重視し、国際社会で求められるグローバル人材の育成を目指す。

社会に開かれた目を持つことが大切

水文学が求める学生像

世の中の動きを察知する広い視野

課題の原因や解決法を考える探究心

社会に貢献しようとする心

水文学に限らず、研究に際しては、何よりも社会に開かれた視野を持ってほしいと思います。私の若い頃は、情報を得ることは簡単ではありませんでしたが、今はインターネットもあり、瞬時に必要な情報を受け取ることが出来ます。世の中の動きを察知し、どこに課題があるのかを見極める目を持つことが大切です。

2つめに大切なのは、課題の原因はどこにあるのか、その解決のために何が必要なのかということを考える探究心です。感性を思いきり働かせて、社会に必要なことは何か、足りないものは何かを見極める。これらを考えることで、自分になりたいもの、すべきことが見えてくるのではないのでしょうか。

更に、自分のことだけを考えて、食べて寝るだけでは動物と同じです。社会に貢献したいという思いこそが人間らしさであり、企業で働くにしても、研究者になるにしても、そうした一人ひとりの志が社会を豊かにするのだと思います。

高校生へのメッセージ

社会の課題を解決するためには、社会や政治の仕組みも含めて、「なぜそうなのか」という物事の本質を見極める目が必要です。それは学問の理解も同じ。単に入試に合格するための知識を詰め込むのではなく、物事の基本的な原理を深く理解するように心掛けてください。



寶馨 教授

たから・かおる 京都大理事補。京都大防災研究所教授。グローバルCOEプログラム「極端気象と適応社会の生存科学」拠点リーダー。京大大学院工学研究科修士課程修了。岐阜大工学部助教授、文部省在外研究員（アメリカ・コーネル大）、京都大防災研究所助教授などを経て現職。国際連合大学客員教授などを兼務。第3回世界水フォーラム優秀メッセンジャー賞、土木学会論文賞・国際活動奨励賞他、受賞歴多数。

研究のきっかけ

100年に1度の 大洪水の発生を 予測する

私が水文学を専攻すると決めたのは、大学1年生の時。大学で入部した野球部の部長が土木学科長で、水文学の専門家だったからです。もし

部長が構造力学の専門家だったら、私も構造力学を専攻していたでしょう。私にとって、野球部の部長との出会いが人生の始まりだったのです。卒業後は、父と同じ国鉄職員になるつもりでした。しかし、教授から「もう少し考えてみてはどうか」と言われ、ふと考え直しました。研究者を勧められたわけではありませんが、別の道もあることを教授は教えてくれたのでしよう。私自身、大学時代は野球に打ち込み、あまり勉強できなかったもので、社会に出る前に勉強もすっかりしておきたいと考え、大学院に進み、洪水災害の予測の研究を始めました。以来、水文学の視点から災害と水とのかかわりについて追究しています。

水文学は、水の様相を研究する地球科学の一分野です。河川の流れや

雨の影響など、広範囲にわたる地球上の水循環を研究します。私の研究テーマは、数百年に1度起こるような極端気象と呼ばれる大雨や大洪水が発生する確率の予測です。日本の治水事業は、1000〜2000年に1度の洪水に対応できるように計画されています。そうした洪水がどの程度の流量になるのかを調べています。以前は降水量や川の流量などの統計資料が乏しく、性能も低かったので、大雨や大洪水が発生する正確な予測は難しかった

研究概要

「世界初」の 発想の原点は 国際交流にあった

のですが、80年代後半から徐々にデータが揃い、コンピュータも高度化したので、精度のより高い予測が可能になりました。

洪水の予測は、毎年最大の洪水流量のデータを基に確率分布を使って統計解析をし、想定する水量を超える超過確率を割り出します。河川やダムなどの防災計画を立てる際、その数値を過大に見積もると、より大きなダムや高い堤防を作らなければ

ならなくなり、必要以上の経費がかかってしまいます。住民への説明責任の観点からも、客観的に超過確率を割り出す方法が必要でした。

そこで、私が考えたのは、**確率水** 文量の予測に「ジャックナイフ法」という統計手法を用いる世界初の方法でした。例えば、50個のデータがあれば、データを1個ずつ抜いて統計分析を行い、50のサブデータを作ります。基のデータにジャックナイフ法で出したサブデータを加えると解析に用いるデータが増えるため、更に精度の高い予測が得られるのです。この方法では、実際のデータ以外に大量のサブデータを用いるため、従来の何十倍もの計算能力が必要になります。科学技術の発達によってこそ可能になった方法といえます。

この方法は、**河川法の改正を機に**、建設省（現・国土交通省）によって日本にある全ての一級河川の河川計画に採用されました。今では国が管理する河川だけでなく、全国の自治体でもこの方法が使われています。

洪水予測にジャックナイフ法を用いるアイデアは、京都大に来ていたカナダの水文学研究者と話していた

時に浮かびました。ジャックナイフ法は日本ではあまり知られていませんでしたが、彼が別の研究に使っているという話を聞いて、洪水予測に活用できるかもしれないと考えたのです。優れた研究をしている大学には優れた研究者が多く出入りします。日常的な国際交流から世界の研究成果に触れることが出来るのも、大きな大学のメリットだと思います。

研究の広がり

アクト・グローバル の精神で 世界を目指す

現在、本学では私の所属する防災研究所が中心となり、「極端気象と適応社会の生存科学」というテーマで研究を進めています。地球温暖化の影響により、水河や万年雪の融解、それに伴う海面上昇、水災害など、多くの気象変動が観測されており、今後、それらは激化する可能性があります。本プログラムでは、水問題、災害問題、環境問題に焦点を当て、理学、工学、農学、情報学などの各研究科が共同で、学際的に教育・研究を進めています。プログラムの特徴は、現場主義で

あることです。本学の生存圏研究所が所有する赤道大気レーダーをインドネシアに設置して、地球規模で大気の動きを観測し、更にアジア・アフリカの各地でも気象観測や大気境界層の観測を行っています。そこで集めた大気や降水などのデータから地球環境への影響を予測するのです。この研究の魅力は、何ととっても学際性と国際性です。分野も国籍も年齢も違う研究者が集まって研究を進めることには難しさもありますが、それ以上に、力を合わせて世界が抱える課題に挑戦していくことに、この上ない使命感や充実感を感じます。

環境問題では、よく「シンク・グローバル」、アクト・ローカリー」といわれます。グローバルな視点で物事を考え、国内や地元で自分が出発点を追求するという発想です。それに対して、私たちは研究のコンセプトに「シンク・グローバル、アクト・グローバル」を掲げました。学生には、研究を通して、知識や実験手法だけではなく、世界規模で物事を捉え、自分の力で考えて地球規模の課題に挑戦する姿勢も身に付けてほしいと考えています。

用語解説

1 確率分布
確率変数の各々の値に対して、その起こりやすさを示すもの。

2 確率水文量
発生確率をベースに、雨量や洪水量などの水文量を測る概念。治水計画を立てる際は、確率水文量の精度を上げることが重要になる。「50年確率の豪雨」「100年確率の洪水」などと表現される。

3 河川法
河川の適切な利用や、洪水、高潮などの災害の防止、流水の正常な機能の維持などを行うための河川管理について規定した法律。1964年に制定されたが、その後、河川利用の変化に対応するため97年に改正された。

4 大気境界層
地上から1km上空までの層のこと。地形や建物などの影響を受けて、乱流が起きやすい。生物の生活圏でもあり、生物が感じる暑さや寒さ、湿気、アレルギーの原因となる大気汚染や花粉の飛散などは、全て境界層の状態によって変化する。

地上付近の風の流れを数値的研究により解明



日比野研志さん

ひびの・けんし 京都大大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球物理学教室気象学研究室博士課程3年。グローバルCOEプログラム「極端気象と適応社会の生存科学」履修生。愛知県立半田高校卒業

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 私の高校時代は、地球温暖化問題が活発に議論され始め

た頃で、テレビのニュースやドキュメンタリー番組で盛んに取り上げられていました。世界の現状を知りたい、大学進学後は環境や災害などの地球規模の課題に取り組み、困っている人々の力になりたいと思うようになりまし。実学的な側面からアプローチすることも出来たと思いますが、学部で学ぶうちに、基礎的

理論的なことへの興味が膨らんでいったので、大学院に進み、気象現象に関する基礎研究を始めました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 地上から高度1kmまでの大気境界層における風の乱れや

流れのメカニズムの解明を目指しています。大気境界層に起こる風は、地形や建物などの形に影響されて複雑に変化し、地上から出る熱や放射性物質を上空に放出したり、二酸化炭素を地面に吸収したりする現象に影響を与えています。地上付近の風が乱れていることによって、熱や二酸化炭素が上空の空気と交換され、地上にいる生物が生きていく環境が保たれるのです。

風の研究というと、計測機で実際にデータを集めて、それを解析するというイメージがあるかもしれませんが、私の研究では、微分方程式によって算出した数値を基に、コンピューター上で風を再現し、風の強さや向き、地形などを少しずつ変えながら、風の変化をシミュレーションする方法を採っています。

研究では華々しい発見は少なく、

地道な作業の繰り返しです。1日中パソコンの前に座り、何も進まないこともあります。それでも試行錯誤しながら少しずつデータの精度を高め、仮説が証明できた時は、研究者としての喜びを感じます。

社会に直接還元できる成果は多くありませんが、将来的には強風注意報などの精度を高めるための基礎データなどに生かすことが出来ると考えています。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 研究者を目指す方には、ぜひ自分で考える姿勢や習慣を身に付けてほしいと思います。研究には終わりがありません。1つ進んだとしても、次から次へと新たな疑

問が生まれ、常に考え続けなければならないからです。

では、どうやって自分でも考える姿勢や習慣が身に付くのか。例えば、数学で分からない問題があったら、すぐに答えや解説を見るのではなく、とりあえず後回しにしておいて、何日か考えてみるというのはどうでしょうか。そうすると、別の問題を解いている時、あるいは授業を受けている時に、「この公式を使えばいいんだ」「あの方法を応用したら解けるかも」というように、ふと解法が思い浮かぶことがあります。そうして、自分自身で理解しながら勉強を進めることで、数学の本質がより理解できますし、物事を深く追究する姿勢や習慣も身に付くと思います。

私の高校時代

ディベート大会で培ったコミュニケーション力

●高校時代の一番の思い出は、2年生の時に友だちに誘われて出場した県のディベート大会です。それまでディベートをしたことはなかったのですが、友だちと準備を進めるうちにだんだんのめり込んでいきました。

テーマは「遺伝子組み換え食品の是非」でした。準備では立論、論ばくなど、ディベートのルールを学び、テーマにかかわる技術や事件について調べて練習しました。結果は3回戦敗退でしたが、目標に向かって友だちと力を合わせた経験は、今でも大きな財産になっています。研究者は1人でじっくり考える力が必要ですが、他の研究者とコミュニケーションを取る力も大切です。ディベート大会のような特別な舞台だけではなく、部活動、行事、授業でもコミュニケーション力を高めることは出来ます。皆さんも毎日の高校生活を大切にして、将来のために力を蓄えてください。

—新課程先行実施総括—

教科間の連携と 中学校までの学びの確認が いっそう重要に

2013年4月に、中学校で新課程での指導を全教科で受けてきた生徒が入学し、いよいよ高校においても、新課程が全教科で1年生から順次実施されていく。2012年度に先行実施となった1年生の数学・理科を担当した先生方に、授業を行って感じたこと、生徒の反応、見えてきた課題、今後の対応について聞いた。

●1年を振り返って
履修科目、内容増にに応じて
指導の工夫が求められた1年

—約1年、新課程の内容で指導をされて、どのようなことを感じられているでしょうか。

久保出 私の担当教科である数学は、新課程で学習内容が増え、教科書も厚くなりました。しかし、3年間を考えると進度を遅くしたくはありません。生徒に苦手意識を今まで以上に持たせないよう、数学科の1年生担当教師4人で話し合い、目線合わせをしながら指導を工夫してきました。

本校では、数学Ⅰ、数学Aは並列履修としました。分野の履修順序は、数学Ⅰは教科書通りにしましたが、数学Aは分野間の関連が薄いので、中学校との接続を意識し、中学校でも学ぶ「図形の性質」を最初に置きました。結果的にはこの順序でよかったと思います。「図形の性質」は、教師の指導経験が浅い作図などを含む分野であるため、授業は手探りの状態が始めました。しかし、生徒はコンパ

スや定規を使って、楽しみながら上手に作図をしており、中学校での学習内容がしっかり定着していると感じました。大学入試で作図が出題される可能性は高くはないと考えているので、定期考査では「作図の仕方を説明しなさい」という問題を出しました。その後、「場合の数と確率」「整数の性質」の順に進めました。「整数の性質」は抽象的な内容で、理系の3年生でも苦手という生徒が多い分野です。そうした分野は、基礎をしつかり押さえることを重視し、問題演習は深入りしないように、教師間で足並みを揃えました。

永井 私の担当は物理です。本校では、1年生で物理基礎と化学基礎の各2単位の履修としました。3年生文系の理科の選択は生物と地学が主流となるため、2年生での履修を生物基礎と地学基礎として連続性を持たせようと考えたからです。

私1人で1年生5クラス全てを教えて感じたことは、理系で重要科目となる物理を1年生でしっかり学んだ上で文理選択をする良さ

石川県立金沢泉丘高校

久保出将司

くぼで・しょうじ

石川県立七尾高校、石川県立金沢泉丘高校を経て、現職。同校に赴任して8年目。1学年担任。数学教科主任。

石川県立金沢泉丘高校◎1893（明治26）年開校／全日制・普通科・理数科・共学／1学年約400人／2012年度入試合格実績（現浪計）は、国公立大が256人、私立大は延べ435人が合格。



富山県立魚津高校

永井俊太郎

ながい・しゅんたろう

富山県立新川みどり野高校を経て、現職。同校に赴任して4年目。1学年担任。進路指導部1学年担当。物理科。

富山県立魚津高校◎1899（明治32）年開校／全日制・普通科・共学／1学年約200人／2012年度入試合格実績（現浪計）は、国公立大が134人、私立大は延べ318人が合格。

と怖さです。

旧課程の理科総合Aでも物理は扱いましたが、それは2年生で物理を学ぶ準備としての内容です。大半の生徒は本当の物理学習とは何かを知らず、数学や理科が少し苦手でも、志望学部に応じて理系を選んでいました。その点、1年生で本格的に物理を学べば、理系への適性をしっかり見極めた上で文理選択ができ、理系を選んだ生徒は、その後の物理学習にも覚悟を持っています。しかし、それは同時に、理系学部を志望しているにもかかわらず、物理を嫌がって理系を選ばない生徒が今まで以上に出てくる怖さもありました。

結果的には、1年生200人中約90人が理系を選びました。1年生で物理を学ばせることは進路選択の大きな分岐点となるだけに、迷っている生徒にはより深く考えさせる進路指導をした1年でした。

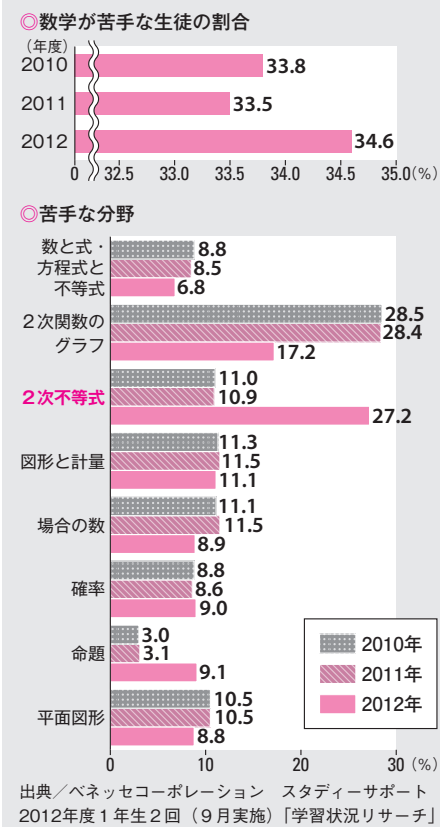
●数学の指導

苦手意識につながるよう

成績層ごとに課題量を調整

まず数学についてうかがいた

図1 数学への苦手意識、苦手な分野



いと思います。スタディーサポートの1年生2回の学習状況リサーチを見ると、2012年度は過去2年間と比べて、数学が苦手と答えた生徒が増えました(図1)。久保出先生がお話しされた通り、学習内容の増加が影響したと思われるます。

久保出 新しい分野が増え、しかもそれが抽象的な内容ですから、放っておいたら生徒の数学離れが進むのは容易に想像できます。私たちが最も懸念しているのは、数学が出来ないと諦めてしまうことです。学習から完全に離れてしまっ

ては、志望校の幅も狭まります。本校では、数学への苦手意識を

持たせないように、分野の順序を工夫した他、課題を見直しました。今まで一律だった課題量を、後期から学力レベルごとに変えたのです。成績上位層には、基礎問題は飛ばしてもよいから発展問題を中心に取り組むよう指示し、数学が

苦手という生徒には、基礎問題中心に取り組むよう指示しました。

永井 課題を減らすと定着度が下がるのではないかと思ひ、課題量の削減にはなかなか踏み切れないものです。よく決断されたと思います。

久保出 発展問題に取り組んでほしい生徒が手を抜いたりしないか不安でしたが、それ以上に数学離

れへの危機感を抱いたので、思い切って学年団に提案しました。課題を出す前に、生徒に課題を分ける趣旨を伝え、どの課題を選択するのかは生徒に任せました。生徒は案外、自分のレベルに合った課題を選んでいきますし、発展問題に取り組める実力があるにもかかわらず、それに取り組んでいない生徒には、個別に声を掛けています。例年ですと、課題を未提出のまま定期考査に臨む生徒が学級に10人はいるのですが、今年はほぼ全員提出していました。これが学力にどう反映するのか、注視していきたいと思えます。

——生徒が苦手な分野のトップは例年、2次関数でしたが、12年度は2次不等式でした（P.39図1）。久保出 2次不等式を苦手としているのは、旧課程に比べて難しい要素が教科書に入ってきたことが原因ではないでしょうか。逆に、高校から中学校に移行した「解の公式」などは、中学校で基礎をしっかり学んでいるため、生徒間の知識のばらつきが小さくなり、定着度も以前よりよくなったと感じて

います。

●理科の指導 ばらつきが大きい中学校の 学習内容の定着度をつかむ

——1年生で物理を指導する上で課題となったことは何でしょうか。

永井 物理は数学と関連が深い教科です。三角関数やベクトルなど、物理にも出てくる内容は、毎年、数学の先生にどう指導しているのかを聞いていましたが、本年度は数学よりも先に物理で扱うことが多く、例年以上に数学科との連携を意識しました。先に教えることは生徒に固定観念を付けることにもなるので、数学が専門でない私が先に教える怖さを感じました。

久保出 例えば、ベクトルは、物理では具体的な物理現象の説明の中で教えると思いますが、数学では一般化した形での説明となるので、物理で先に教わる方が生徒にとって理解しやすい流れかと思っていました。

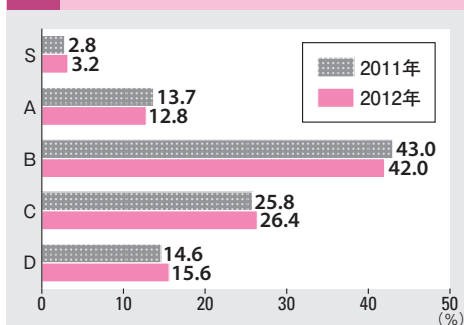
永井 そういう側面もあるかもしれません。ただ、数学よりも先にベクトルを扱うのは、数学と物理

の両方の要素を同時に教えることになるので、予想以上に難しいものがありました。

久保出 本校では、1年生の理科は化学基礎と生物基礎なので、そのような課題は生じていませんが、数学も新課程による他教科の變化を知ることが大切だと感じます。

永井 中学校の学習内容とその定着度を、もっと丁寧に確認すべきだったとも思っています。新課程では、「電気」「ばね」などが中学校に移行しましたが、生徒にその定着度を聞いてみると、出身校によってばらつきがありました。高校入試の結果を点数だけでなく答案まで見て理解度を確認した方が、より正確に生徒を見取れると思えました。

図2 1年生の国数英総合の学力層別成績
過年度比較



*スタディーサポートの結果は「学習到達ゾーン (GTZ)」を指標として評価している
*各段階の学力レベルの目安は次の通り。
S層：進研模試 偏差値68以上程度 A層：進研模試 偏差値56～68程度 B層：進研模試 偏差値44～56程度 C層：進研模試 偏差値32～44程度 D層：進研模試 偏差値32未満程度
出典/ベネッセコーポレーション スタディーサポート 2012年度1年生2回(9月実施)「学習状況リサーチ」

極化が進むと予測されていました。実際、スタディーサポートの1年生2回の結果を見ると、若干ではありますが、中位層が減り、下位層が増えています(図2)。

永井 生徒と日々接する中で、学力層が大きく変わったという実感はありません。ただ、模試の結果を見ると、数学が苦手な生徒は増えていきます。また、偏差値60以下の層が全体的に広がっており、特徴的だったのは、2ポイントの範囲で上位と下位の入替わりが起きていたことでした。生徒と面談をすると、同じ学力層でも、高校での学習の厳しさに危機感を抱いている生徒と、高校生になりきれ

●新課程生の特徴 グループ学習などの参加型 授業に積極的に取り組む

——新課程では、生徒の学力の二



ていない生徒とで、学習の時間や質に差が出てきているようです。

久保出 私も学力の二極化が進んでいるとはあまり感じません。ただし、下位層が多い傾向は続いているので、学力の底上げが課題であることには変わりません。

——1年生に今までとの違いを感じることはあるでしょうか。
久保出 最近感じるのは、生徒が

参加型の授業を好むことです。作

図やグラフの読み取りなどに積極的に取り組みますし、グループ学習では相手が異性でもためらわずに話しています。活動をする生徒の授業への集中力が持続する効果があるので、適宜、活動の要素を取り入れるようにしています。

永井 高校の理科は抽象的な内容になるので、生徒は実験などを行う中学校の授業と大きなギャップを感じます。かといって、今の私の力量では実験の時間を確保できません。少しでも活動に近いことを授業で行おうと、私もグループ学習を取り入れています。その効果を見たいと思い、次の定期考査では、グループ学習で扱った類似問題を出そうと考えています。

久保出 グループ学習では扱うテーマの難易度の設定が難しく、人数の多い中・下位層に合わせる事になります。上位層には物足りないかもしれないかもしれませんが、友だちに説明することで基礎をより深く理解できる機会になっているように、積極的に取り組んでくれます。

● 全面実施に向けての課題

他教科の変化を知り

教科を越えて足並みを揃える

——本年度を踏まえ、全面実施に向けた課題は何でしょうか。

久保出 1つは教材研究だと思えます。増えた内容を進度を変えずに教えるためには、教材の見直しや指導内容の精選、教え方の工夫が更に必要であることを、この1年で痛感しました。新出分野は初めて教える教師もいるので、教材研究をしつかりすべきでしょう。

永井 私は、特に生徒の中学校までの学習内容の定着度を確認して指導を考える必要性を感じました。また、全面実施となれば多くの教科で指導内容が増加したり、活用中心の授業といった指導の質の転換が求められたりするので、教科間の連携が一層重要になると考えます。本校は今年度、英語の研究指定を受け、活用中心の授業を行っており、英語も先行実施のような状況にあります。今まで授業でじっくり教えていた語いや文法は課題で補う形となり、英語科は生徒に

その課題に丁寧に取り組んでほしいと考えています。しかし、学年団でその状況を把握しておらず、他教科では今まで通りの量の課題を出していました。生徒の家庭学習時間は課題量に応じて増えるわけではないので、教科間で話し合い、課題量を調整したいのですが、なかなか検討が進んでいません。

久保出 他教科のことを知らずに、自分の教科だけを見て課題を増やしているのは、生徒は消化不良を起します。力が付かないばかりか、達成感も感じられず、学習意欲にも影響するでしょう。

永井 今まで経験則で進めてきたことでも、新課程では学年団で他教科の状況を知り、全体のバランスを見て指導を考えることが重要ではないでしょうか。確かに、指導を変えると生徒の学力にどう影響が出るのか不安になり、課題を減らすのにも勇気がいります。しかし、新課程は、生徒の状況をしっかり把握し、その状況に応じて教科間・教師間の足並みを揃えて指導をしなければならぬほどの変化なのではないかと感じています。

上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム

新課程直前・高校英語 「授業は英語で」を考える

— 何のために、どのように行うのか —

英語の「授業は英語で行うことを基本とする」。こう謳われた高校の新学習指導要領の全面实施の日が迫る中、2012年12月2日（日）、高校教師を中心とする教育関係者を対象に、英語による授業の狙いと課題、方法などについて考えるためのシンポジウムが開かれた。その内容を紹介する。

生徒の自己表現力・対話力を育成するために

本シンポジウムは4つのプログラムから成る（図1）。

プログラム1では、上智大言語教育研究センター教授の吉田研作先生と慶應義塾大環境情報学部教授の田中茂範先生が、グローバル化が進む現代の英語教育に何が求められるかについて対談した。田中先生は、多様な価値観を持つ人々と意思を疎通できるように、英語による生徒の自己表現力と対話力を伸ばすことが重要であると強調。吉田先生も同意し、英語教育の目的とは、単に知識を教えたり、学んだりすることではなく、

それを活用できる力を付けることであると語った。

プログラム2では、文部科学省教科調査官の向後秀明先生が、英語で授業を行うことの狙いを説明。生徒の思考力、判断力、表現力を伸ばすために、英語による言語活動を充実させてほしいと訴えた。

プログラム3では、群馬県教育委員会指導主事の津久井貴之先生が、群馬県内の公立中等教育学校で自身が指導した英語による授業の様子を紹介。各単元で生徒に付けさせたい力に応じて教材をアレンジすることの重要性を話した。また、授業改善の方法として、自分の授業をビデオで撮影し、見返すことを推奨した。

図1 シンポジウムのプログラム

◎プログラム1 対談	<p>新課程・高校英語「授業は英語で」その先にあるもの — これからの時代、子どもたちに求められる力とは</p> <p>上智大言語教育研究センター教授 吉田研作先生 慶應義塾大環境情報学部教授 田中茂範先生</p>
◎プログラム2 講演	<p>「授業は英語で」なぜ行うのか — 生徒・教師は教室でどのように変わるのか</p> <p>文部科学省教科調査官 向後秀明先生</p>
◎プログラム3 実践事例紹介	<p>「授業は英語で」どのように行うのか — 3年間の見通し方、単元のつなぎ方、1時間の作り方</p> <p>コーディネーター／ 東京外国語大大学院総合国際学研究院教授 根岸雅史先生 事例紹介／群馬県教育委員会指導主事 津久井貴之先生 コメンテーター／ 東京外国語大世界言語社会教育センター専任講師 長沼君主先生</p>
◎プログラム4 検討	<p>「授業は英語で」行う上での課題について考える — 「英語教師50人に聞きました」からみてきたもの</p> <p>コーディネーター／上智大言語教育研究センター教授 吉田研作先生 パネリスト／ 松山大人文学部教授 金森強先生 青山学院大文学部教授 アレン玉井光江先生 群馬県教育委員会指導主事 津久井貴之先生 東京外国語大大学院総合国際学研究院教授 根岸雅史先生</p>



授業は基本的に英語で行う

本シンポジウムに先立ち、ベネッセコーポレーションが高校の英語教師50人を対象に、英語による授業のどのようなことに不安を感じるのかをヒアリング調査したところ、多くの教師が次の3つの不安を挙げた。

① 英語が苦手な生徒は英語だけで理解できるか

② 大学入試に対応できる学力を付けられるか

③ 文法は日本語で説明しないと生徒は理解できないのではないか

「突然授業が英語で始まったら、生徒は戸惑わないか」といった質問も多く上がった。これに対して、津久井先生は次のように答えた。

「教師が生徒に『日本語でもいいよ』と言うのは禁句であると、私は考えています。『日本語でも英語でもよい』となると、生徒は英語を使おうとしないからです」

コーディネーターとしてプログラム4に携わった吉田先生も、津久井先生に賛成した。

「英語で授業を組み立てるという大原則は変えずに、どう考えても日本語で指導した方が効果が上がるものについてのみ、日本語を限定的に使うことも考えられるでしょう」

「突然授業が英語で始まったら、生徒は戸惑わないか」といった質問も

「英語で授業を組み立てるという大原則は変えずに、

るところから始めることが大切だと実感しました」「英語の授業で生徒の表現力を伸ばせる可能性を感じました。英語による授業に対する私の覚悟も固まったと思います」など、今後の参考になったという声や決意の声が目立った。

そして、「授業は英語で」を考えた末にたどり着いた次のような声こそ、新課程の狙いそのものではないだろうか。

「これまでは大学入試に合格する力を付けることを指導のゴールと考えていました。しかし、今日のシンポジウムに参加したことで、入試だけにとどまらず、大学入学後を見据え、自分が生徒にどのような力を付けさせたいかというビジョンをつくることこそ必要だと痛感しました」

図2 英語で授業を行う上での3つの不安とその検討

不安① 英語が苦手な生徒は英語だけで理解できるか	
回答者	松山大人文学部教授 <small>かなもりつよし</small> 金森 強先生
回答	ただ授業を英語で行うだけではなく、英語や英語学習に対する生徒の興味・関心を高める必要がある。そこで鍵となるのは、「can-doリスト」を生徒の実態に応じて作成することである。先生方には、生徒にどのような力を付けさせたいかを考え、そこから逆算してカリキュラムや教材を決めていただきたい。また、生徒に英語で何かを表現したいと感じさせることも大切である。そのため、他教科と連携し、生徒の知的好奇心を高める仕掛けをつくっていくことが求められる。
回答者	青山学院大文学部教授 アレン玉井光江先生
回答	生徒の英語力を伸ばすために重要なことは2つあると、私は考えている。1つは、文脈の中で英語を理解させること。もう1つは、日本語でのコミュニケーション能力を鍛えることである。私は小学校の外国語活動の授業に指導者としてかかわっているが、そこでもこの2つの重要性を実感している。先生方には、英語ばかりでなく、日本語で表現する力を伸ばすことも大切にいただきたい。
不安② 大学入試に対応できる学力を付けられるか	
回答者	群馬県教育委員会指導主事 津久井貴之先生
回答	授業で徹底して生徒の英語による表現力を高めていけば、入試問題は解けるようになる。私は、授業で学習したことを定着させるためには復習が大切だと考え、生徒に復習のためのノートをつくらせ、定期的に提出させていた。ただ、生徒には復習する内容を自分の目標や課題に応じて自由に決めさせていた。これにより、生徒の学習内容や方法の理解は深まり、復習に対する生徒の意欲も伸ばすことが出来たと感じている。
不安③ 文法は日本語で説明しないと生徒は理解できないのではないか	
回答者	東京外国語大大学院総合国際学研究院教授 <small>まさし</small> 根岸雅史先生
回答	一口に文法の説明といっても、言語形式などの説明と、その文法形式の概念、つまり文法形式の表す意味の説明がある。後者は、日本語で行うよりも英語で行った方が生徒には分かりやすいと、私は考えている。また、文法の説明といった時に大事なものは、後者の文法形式の意味を伝えることではないか。

「これまでは大学入試に合格する力を付けることを指導のゴールと考えていました。しかし、今日のシンポジウムに参加したことで、入試だけにとどまらず、大学入学後を見据え、自分が生徒にどのような力を付けさせたいかというビジョンをつくることこそ必要だと痛感しました」

ARCLE®
ARCLE (アークル) :
Action Research Center for Language Education

ARCLEはベネッセ教育研究開発センターが運営する英語教育研究会です
 * 今回のシンポジウムに関する詳細は、2月下旬に下記ARCLEのウェブサイトでご覧いただけます。
 ▶ <http://www.arcle.jp/>
 → トップ > 研究ノート・研究会レポート

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

学生に学びの土台となる

スキルを明示し、養成する大学

大学生として必要なアカデミックスキルや、社会で必要とされるスキルを学生に示し、支援・養成する大学が増えている。従来、専門教育を通じて暗示的に養成していたとされるスキルをあえて明示して学ぶ必要性を説き、学部を問わず必要な力として、その養成に力を入れている大学を紹介する。

数学的思考力、文章作成力、
英語力を全学共通で育てる

早稲田大
「WASEDA式アカデミックリテラシー」

◎課題意識と狙い

今の大学生に必要な力は、自分の考えを表現し、意思を伝えること——これは、大学での学問にとどまらず、社会に出ても欠かせないスキルだ。この、あらゆる学問分野の基礎的能力を身に付けるための科目群が、早稲田大の「WASEDA式アカデミックリテラシー」（通称、1万人シリーズ）で

ある。学生に最低限、身に付けてほしい力を数学的思考、文章作成、英語コミュニケーションと設定し、2008年度にそれら3つの分野を全学共通科目として設置した。ここでは、数学的思考と文章作成を中心に紹介する（*）。

◎取り組み内容

数学的思考、文章作成の講義は共にeラーニングで行う。全学生が履修できるように、受講希望者が時間割や場所の制約を受けずに受講可能にするためだ。

講義は1回30分〜1時間で、毎回ネット経由で提出する宿題を課

す。それぞれ8回の受講で1単位となる。また、授業で分からなかったことは、学内にある対面指導室、またはメールやBBSで質問できる。12年度の履修者数は、「数学基礎プラスα・β・γ」（数学的思考力が4690人（6科目合計）、「学術的文章の作成」（文章作成力）が4243人（1科目）だった。

数学を選択せずに入学してくる学生もいます。また、数学を学びたくても、数学の科目が少ない学部もあります。全学共通科目とすることで、多くの学生に受講してほしいと考えました。特に、文系で数学が出来れば、社会で必ず役に立ちます」

しかし、「文系だから数学は関係ない」「数学は計算ばかりで嫌いだ」という学生は少なくない。そこで、授業内容は、高校の学習内容の復習ではなく、金利やローンといった社会人として知っておきたいテーマを基に数学的思考を養うこ

「経済学を学ぶのに、大学入試で

* 英語は、受講生最大4人に対してチューター1人という少人数で展開される実践的な英会話の授業「Tutorial English」が「1万人の英語」として実施されている（2012年度の履修者数は7,833人）。

図1 早稲田大 WASEDA式アカデミックリテラシーの位置付け

4年次				
3年次	人文系	社会系	理工系	教養系
2年次				
初年次 (基礎教育)	「文章作成力」(1万人の日本語)			
	「英語コミュニケーション力」(1万人の英語)			
	「数学的思考力」(1万人の数学)			

なるべく早い段階で3つの力を養成し、2年次以降の学びの土台を作るのが目的。「英語コミュニケーション力」「数学的思考力」の科目は、2年次以降も必要性を感じた時に履修できる

*学校資料を基に編集部で作成

とを重視し、学生の関心を高めるように工夫した。入門編の基礎プラスαでは、高校で学ぶ範囲の数学を具体的な事例(金利や最適化など)を用いて教える。ここで興味を持った学生は、β、γと大学レベル(解析学・線形代数)に発展する科目に取り組むという流れになっている。講義後に毎回課す小テストは、最終試験と合わせて60点以上で合格と

している。更に、意欲のある学生には発展的な問題も用意されている。法学部4年の平山万里さんは、「お金を借りると利子がいくらになるのか、限られた予算でどう買い物をするかといった内容で、高校で習った数学の基礎が実生活で使えるという実感がありました」と話す。「学術的文章の作成」は、学術的な文章を書くに当たって必要な基礎技能を教える科目だ。担当の佐渡島紗織准教授は、「書くことは思考することであり、全ての土台です。文章の仕組みを丁寧に加え、単に『文章を書く』ことだけでなく、学生が『自分の思考を深める』スキルを養成しています」と語る。

授業では、毎回1つの技能を取り上げ、400〜600字の文章を書く宿題が出される。学生が提出した課題文章は、指導員が一人ひとりにフィードバックする。その内容は、単なる「添削」ではなく、「学生が言いたいことを最も効果的に伝える方法」の助言

である。そして、文の作成、語の選択、全体構成、文献の引用などを指導する。

評価基準のすり合わせと練習をする指導員のグループ・ミーティングによって、指導の質を保つ工夫も行う。「ライティング・センター」という対面の支援機関もあり、レポートや学術論文を作成する際に個別に助言を受けることも可能だ。

◎成果と課題

「数学基礎」は、文系の学生からも好評だ。「物事を見る時に数学的に考えることが出来るようになった」「論理的思考力が身に付いた」などの声が挙がっている。

受講確認や採点は自動化されているため、受講者数の制限がなく、今以上に受講者を増やすことは可能だという。今後は、履修促進を更に行うと同時に、統計学など、数学的思考力の幅を広げるような科目の拡充を検討している。

「学術的文章の作成」では、第1回と最終回の課題の評価点を比較したところ、全授業を受講し、全ての課題を提出した履修者は文章作成力を伸ばしていた。「一つひとつの文

章作成技能を理解し活用し評価してもらおう、それを8回繰り返し返すという循環が功を奏しているのではないかと佐渡島准教授は語る。

こうした効果から、「学術的文章の作成」を必修科目とする学部も出てきており、受講者は今後も増えるとの予測だ。しかし、現在の60人の指導員体制では4000人強の学生を指導するのがぎりぎりの状態だ。より安定的に対応できるように指導組織を拡充していく必要があるというのが今後の課題だという。

文理に関係なく数学で論理的思考力を育てる

大阪府立大
[Math for all]

◎課題意識と狙い

大阪府立大は「学士課程教育における数学力」の育成を全学的に推進している。2010年度には、「学士課程教育における数学力育成 Math for all」が、文部科学省の「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」に採択された。その中で、論理的思考力や情報分析能力などを総合した「数学力」を、

図2 大阪府立大 「Math for all」の位置付け



全ての学域で、専門科目に入る前に学域に応じた数学の基礎を学ぶ。人文系の分野を専門とする場合も基礎数学と統計学は必修である。なお、縦棒が学域全体にかかっていないところは、同じ学域内でも学類ごとに科目の配当が異なる

*学校資料を基に編集部で作成

専門分野にかかわらず学生全員に身に付けさせるために、カリキュラムの見直し、教育方法の改善、到達度の評価等を行っている。

この一環で、同大では文系の学生にも数学を必修科目としている。副学長で高等教育推進機構長の高橋哲也教授は、「文系の学生にも数学を学んでもらい、本学で展開するレベルの高い文理融合の学びを実現した

いと考えています。また、文系であっても数学リテラシーは必要という課題意識もあります」と語る。

◎取り組み内容

文系向けの必修科目は、1年生の「基礎数学Ⅰ・Ⅱ」、1・2年生の「統計学基礎Ⅰ・Ⅱ」だ。基礎数学では、数学が実際の現場でどう役立ち、応用されているのかを、具体的な事例を通して学ぶ。統計学基礎では、統計学の基本的な考え方・手法を学び、具体例を通してデータを分析する能力を養う。

基礎数学の授業は4クラスで、学生数は1クラス70〜80人。4人の教員で約300人を担当する。授業は、「学内での貸し自転車サービスを企画しよう」など身近なテーマから入り、次にテーマに関連する数学の問題を解き、数学的解決法を教えた上で、最初の身近なテーマを解決するという流れを取っている。

従来、大学での数学は、まづ抽象的な数学的定義から入り、形式的な計算手続きを学び、実社会とあまり関連のな

い応用を学ぶというパターンが多く、いわば数学の専門家の視点・言葉で語られる世界だったといえる。それに對し、これらの科目は、学生が最低限の数学リテラシーを身に付けることが目的である。重要なのは、教員が専門分野を教えることではなく、数学的思考を養成する授業を行うことだ。そのため、高等教育推進機構の川添充教授をはじめ、数

学担当教員の授業プランは、数学が専門ではなく、教育心理学が専門の現代システム科学域・岡本真彦教授と共同して作られる。

岡本教授は、「数学が出来ない学生の気持ちを推し量ることや私の専門である小・中学校での教育ノウハウを基に、数学が専門の教員の意識改革から行いました。学生が理解できる言葉で説明する、出来るだけ具体的事例に当てはめて説明する、専門用語で語らないといったことです。まず、文系学生の弱点を知ることから始めています」と説明する。

このように、数学と実社会とのつながりを意識させる他、複数の問題を留意して概念別に整理させたり、グループワークを取り入れたりし

て、数学の苦手意識が前に出てこないように配慮する。数学的な考え方や論理の展開力を養成するのが目的であるため、試験には計算機や資料の持ち込みを可としている。

授業以外に個別のフォローも行う。教員は質問受付室に交代で常駐し、学生の質問に答える。ここでも、正解を教えるのではなく、解答に至る過程を指導することに留意する。

◎成果と課題

学生アンケートの結果によると、「数学はやはり難しい」という声があるものの、「数学が役に立つことが分かった」「数学的なものの考え方が身に付いた」とおおむね好評だ。宿題の提出率や試験の点数も良く、当初懸念されていた「必修科目にすると、文系学生の単位取得に影響があるのでは」という心配も杞憂に終わりそうだ。教員も質問受付室で学生の声を聞くうちに、「学生が何を分かっているのかが分かる」という効果を生んでいる。

科目の内容は今後、学生のニーズとすり合わせながら、毎年見直していく。専門教育担当の教員とも協議をし、更に高度な数学教育が可能か

自分の文章を見直し
推敲する力が付いた



早稲田大教育学部
複合文化学科1年
小園 未和
（カナダ・Aldergrove
Community
Secondary School 卒業）

私はカナダの高校出身で、日本の大学を選んだものの、日本語の文章力に自信がありませんでした。ですから、入学式で「学術的文章の作成」を紹介され、すぐ受講を決めました。授業では、毎回目標があり、達成すると点数が付くので、楽しく学べました。授業のビデオは一方的な内容ではなく、登場する学生がディスカッションをしたりするなど参加型授業のようでした。受講して、文章力が付いたという手応えは、他の授業のレポートを書く時に実感します。書くことに抵抗がなくなり、自然と自分の文章を授業で習った観点で推敲できるようになったからです。悩んだ時はライティング・センターを活用しています。ライティング・センターでの文章指導は一方的に添削されるのではなく、疑問点を聞いてもらった上で複数の案を出してもらい、最後は自分で判断する形なので納得感が高いです。私は数学基礎も2科目履修しています。所属する学科は統計学が必修なので、その入門として役立っています。

大学で改めて数学を学び
論理的思考力が身に付いた



大阪府立大現代システム科学
域環境システム学類1年
北出 茜子
（大阪府私立清教学園高校卒業）

高校では数学があまり得意ではなかったのですが、この学域では数学が必修だと聞き、ついていけないが不安でした。実際に授業を受けてみると、高校までの数学と違い、現実の問題の中で数学を扱うため、「こんなところで微積分を使うのか」といった発見がありました。理系のように直接、専門科目の学習に必要となるわけではありませんが、文系でも客観的な視点や論理的思考が身に付くと思います。思考のための考える手段としての意味があり、数学そのものを勉強するというよりも、「考えること」の大切さを学んでいるような感じでした。数学的に考える、論理的に考える、というように、思考のパターンが増えたと思います。授業で先生は「大丈夫？」と親身に聞いてくれますが、数学の苦手意識が完全には抜けていないので、正直、しんどいと思うこともあります。しかし、数学の必要性は理解できたのでやるしがあります。授業では、友だちと相談しながら課題を進めて、頑張っています。

どうかなども検討中だ。

現代システム科学域1年の大室雪乃さんは、「経済を専門に学びたいので、基礎から分かりやすく教えてもらって助かります。高校までの数学に加えて、新しい発見があり、何のために数学を学んでいるのか、改めて理解できています」と語る。

進路指導に生かす

学びに必要なリテラシーを
組織的に育てているか

今回の2つの事例は、大学での学びをより高度に行うための土台づくりであり、大学卒業時の学びの質保証にもつながる取り組みだといえる。数学的思考力や文章作成力を組織的に育成することは、一見当たり前に見える取り組みだが、文理を問わず、その必要性を説き、実際に学生向けに分かりやすく提示されている例はまだ少ない。こうした全学的な取り組みは、大学の育成方針を表しているものといえる。学部の特長内容に加えて注目すべきポイントとして捉えたい。

取材・編集協力：山内太地

事例以外の特徴的な大学・学部を紹介 アカデミック・リテラシー教育実施大学

●北海道大
スタディスキルセミナー

アカデミック・サポートセンターが、ノートの取り方、タイムマネジメント、レポートの書き方、情報リテラシー、プレゼンテーションの方法などの講座を開講している。

●青山学院大
社会情報学部

1、2年次に、英語、コンピュータ、数学を徹底的に鍛える。英語の授業では日本語禁止。Visual Basicを用いたプログラミングが1年次の必修科目。数学も2科目以上履修し、更に統計学も必修科目としている。

●明治学院大
共通科目

「アカデミック・リテラシー」科目を新設し、論理的思考力とレポート作成のトレーニングを行い、文章読解・表現技法の基礎力を鍛える。英語科目はオーラシー能力に重点を置いた授業を1年次に展開。

●名古屋大
アカデミック・イングリッシュ

「ONE」の全員受験、習熟度別クラス編成、eラーニング教材を用いた課外学習、パラグラフ・リーディング、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーション中心の授業など、教養教育の必修である英語科目を抜本的に改革。

答えのない中で、教師も生徒も「ベター」を目指し続けることこそ教育

社会に旅立つ生徒に伝えたいことは、答えが1つとは限らない社会で自分なりの答えを見いだす大切さである。12月号の特集ではまさにそれが具現化されており、登場した社会人が、答えが1つではない課題に自分らしく取り組む姿に感動を覚えた。完璧な社会はこれまででなかったし、これからはありえないだろう。そのような社会で「ベター」を目指し続けることが、生きることであり、成長することではないか。玉ねぎのようにむいてもむいても次の課題が出てくるのが社会だ。ならば教育も、玉ねぎをむくように、教師と生徒が「ベター」を目指して皮をむき続けることが大切であり、その過程こそが教育だと思つて。ゴールがないからこそ社会は楽しく、教育は楽しい。〔岩手県立軽米高校・川村俊彦〕

地域を大切にからこそ、国際的な場所も大切に出来る

12月号の特集を読み、「地域に生きる」は「国際的に生きる」と相反せず、両立するものだと感じた。もちろん、物理的には不可能だが、考え方、行動の仕方は共通するものが多い。また、地域を大切にからこそ、他人の、他国の地域である国際的な場所（場面）でも大切に出来ると思う。そうした人を育てたいと感じた。NPO法人地域交流センター津屋崎プランチ代表・山口寛さんの「グローバル人材は、視野を広く持つているのと同時に、自分が小さな人間であることを知っている

VIEW'S SQUARE

Volume 6

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

人」という言葉に非常に共感した。北海道旭川東高校・松井恵一先生の「母校で頑張った思い出をつくるのが地域への愛着につながる」という言葉も印象に残った。本校は京都にあるため状況は異なると思うが、高校生活をただ楽しいものだけに終わらすことなく、頑張った、しんどかった、それを乗り越えたという達成感を持って卒業させたい。

「京都市・私立京都橘中学・高校・橋本治代」
現状打破に向け、出来ることを取り入れていきたい

12月号「指導変革の軌跡」の京都府立嵯峨野高校の取り組みには、以前から関心があった。京都こそすもす科は、現状を打破して、指導を飛躍的に向上させる役割を担えたいと思う。静岡県・私立加藤学園暁秀高校・中学校が行う東京大対策は、公立校で行うのは無理だと尻込みをしまいそうな内容だったが、近いことをしなければならぬとも感じている。こうした取り組みを行う高校と、行わない高校での生徒の進学実績を対比して、「やり過ぎではないか」「教師の負担が増えるのではないか」という声に負けまいように、出来ることを取り入れていきたいと思つた。

〔新潟県立長岡高校・清水哲〕

教師川柳

肩ならべ同じ目線 いつまでも

鳥取県・砂丘のイルミ

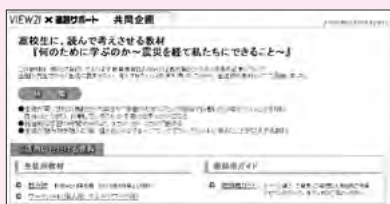
編集後記

◎「グローバル化に対応せざるを得ない」「意見を伝えることが苦手」など、グローバル化における日本・日本人の状況は、否定的・悲観的に語られることが多いように思います。今号を通じて、私は異なる見方が持てました。世界に目を向けることは、新しい価値観や幸せの形、日本や地域の良さ・強みを再発見できるチャンスにもなること。日本の教育が大切にしてきた貢献の意識、他者を尊重する姿勢こそ、日本が世界に誇れる、還元できるものであり、アクションの原動力となること。私も、実際の居場所がどこであれ、仲間と共に新しい景色を楽しみながら「世界に生き」たいと思います。（青木）

高校生に読んで考えさせる教材（無料）

「何のために学ぶのか～震災を経て私たちにできること～」をご用意いたしました

「VIEW21」高校版2012年6月号の特集「他者のために学ぶ」をお読みいただいた先生方から「授業で生徒に読ませ、考えさせたい」との声を多くいただきました。そこで、記事にワークシートなどを加えた、生徒用教材をご用意しました。ぜひ、「総合的な学習の時間」やLHRなどでご活用ください。右記ウェブサイト「ベネッセハイスクールオンライン」から無料でダウンロードしていただけます。



http://bhsso.benesse.ne.jp
*Benesse High School Online は高校の先生専用の情報サイトです。ご利用には学校別のID・ログインコードが必要です

ベネッセ教育研究開発センター高等教育研究所 ホームページ開設のお知らせ

ベネッセ教育研究開発センター高等教育研究所のホームページを開設しました。高等教育に関連した独自の調査データなどを公開しながら、これからの社会で活躍できる人材を育成するための大学教育改革を支援します。
<http://benesse.jp/berd/koutou/index.html>

VIEW21

2013
April
4月
Volume 1

次号は
4月2日発行(予定)
「VIEW21」高校版は
年6回の発行です

VIEW21 2月号 Vol.6

2013年2月14日発行

発行人 新井健一
編集人 谷山和成
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満、二宮良太
撮影協力 荒川潤、川上一生、松原 誠、南 弘幸、ヤマグチイッキ
イラスト協力 山本重也
VIEW21編集部
〒206-8686 東京都多摩市落合1-3-4
電話 042-311-3391

©Benesse Corporation 2013